二十四輩順拜圖會

後篇

常陸

三

親鸞聖人御舊蹟二十四輩順拜圖會後篇巻之三

目録

○常陸之部

外森山唯信寺
廣林山真佛寺
橋川 往女の塚
薬師神社
竹井極楽寺
刑部ノ妻成佛の塚
絶塚
國君の塚如信上人塚
如信上人往生塚
小壺山阿弥陀寺
霊岩ヶ張て妻人と伴流
妻を害して首級を洗ひし来
徳池山信願寺
長塚 孫八が宅
薬師の井 稲田の後室入のぶちろ御服を献じ
二基松 三基松
絶塚
冨田五郎妻塚
塚の涙
小壺の佛舎利
枕石村
法蓮山観佛寺
法王山苔重寺
幽霊の涙
絶塚 絶石
御堂宮濱寺
多賀五郎妻塚
巌松山願入寺
猫原山上宮寺
大門山枕石寺
多食山西光寺

久米願入寺　西行の和歌

信照山專命寺

金沢願入寺

畠谷山光念寺

玉川山常弘寺

額光山若徳寺

王跡山青蓮寺

明法坊の墓

毘沙幢山願願寺

以上

親鸞聖人御舊跡二十四輩巡拜圖會後編卷之三

河州專教寺　了貞　撰

常陸國　國考考第二巻之考るを

外森山唯信寺　東流　常州茨木郡宍戸の西山の尾の郷之田所とあり

二十四輩第二十二番宗祖聖人の門弟宍戸守唯信法師の開基之始唯信房出國郡河郡宍戸守より於て一宇を営構專教化あり後師命より河内國へ移住して化益せり　河州渋良郡世時村專應寺に其書錄ありて法副今ゝ有傳ふ

それより宍戸守の旧跡退廢及び中絶ゆ緣あて今の宍戸大田所より再建し　新たに寺号を淨土寺と改しとや　宍戸守阿房の法席を傳持ゝ

法喜山教佛寺　東流　日國日郡河和田村とあり

當寺は聖人の後第唯圓大徳の開基也四唯圓房と申し小祠宮あり阿闍梨禪念房の息男にて大納言弘雅阿闍梨本唯若大徳と

外森山
惟信寺

まゝ異母の舎弟を高祖聖人御帰洛の後仁治元年十九歳はじめて聖
人の御弟子となりたまへり（干時聖人六十八歳）法名を唯円とぞ称り名字は禀願房なり
てあく真宗の蘊奥を極め頗諸弟子に勝れたりけれ大部平右郎これを
招請せしまゝ師命にしたがく辞をうるを得ざれば終に当国に下向し此
地に弘法の教学を真宗と号し専勧化あり道に交
永十一年（干時五十三歳）上洛のおりから西縁に依て和州吉野郡下市秋津川
の辺に宿を営み（今の下市村）暫彼地に教導を施し関東にくだりて
おもせしが正嘉元年再上洛し（是如上人の面授なり）同二年二月
六日終に下市に真寺に於て寂を示し（干時六十八歳にして化を遂られたり）其後暫霊雨数
旬にして元応二年の比か山の内院の寺号を改て報恩寺と称しけるや（永享年間の頃
即ち大部平右郎の弟平太郎こゝに居住し其後裔今に大和国にあり）
また大部おなじ所に籠居ありて唯円房を師匠と崇め
らひ給へをそあらいあやまりて平右郎の嫡子と雖も世間にありて後平右郎と号し
はた大部の高徳来り帰依されたる甚幸

唯円房の御事世に伝へる所を案に彼平右郎が舎弟平治郎こゝに居あり
性質勇猛剛強にして弥陀を信じ奉らず
某なる者いそれに引入れ善後世の為のみ折ふしに聖人の国を
所化遍まねくなれいに人を化し法を説て法でふく御教化と信じ奉
せ濫に二心なく信女なりしかば聖人も特に目をかけ御真筆の名号と接
よ〜語ひ〜に平治郎のこゝに来りしが平治郎のくしんにて妻女のうるさい心を以て我に思ひて後中何
の不用なあ〜人を必ずと外に通ひる密夫のあることを一途に思ひつゝ不法
討とてそひをそらさんあとまさと霊より出るとて打ちかけるの本源を
妻女のうるを絶まびるることを恐〜名れ妻女をうけ霊〜も平治郎
他行なれば私に聖人の御坊へ参詣〜御勧化を聴受〜何心なく帰
々るを平治郎まことに見るよう訪もうけば後折に切付しが房先より
乳の下まぐ切さげられ嫌をむべ〜妻女は一刀の下に息絶えうせ
平治郎は去とも〜〜〜と独歩び其場宿をへうるがいるる
事なる妻は美なるして其よう〜〜〜なる見るなく立出て平治郎の
面とつく〜まりう今霊は何とうせさせ給ふ御親のざるべ見へ
せ給ふいとしいなる平治郎は大なる仏天〜何さま怪敵の事なと知りし
即ありしなるぐもをつぶさに物語るは妻もとりふ折愛き寄敵の

平次郎妻を
害して首
因を結ぶ
図

真佛寺
中川

廣林山
真佛寺
法華山
鞍佛寺
鞍佛寺

そひをはしるるがごとくそも日来怨しまする所かとけの我を縁に成ぬる
りやと彼禅尼の名号を五出り又てあしび不思議なるべく名号の
樣さまざまきれする又ぞ妻も信心弥堅くなるぞろ涙をながしあさほ三我
らぞ凡の身ようよう終ふるの効徳なやと称名りろくもよろこ
おがめたさ〜もの平治郎もかくまひてうり奇特を見て霊
験時々強〜つく忽ち改悔の心を生じ妻女とこうふ聖人の御坊又
主の後の御弟子なりぬるとうん右の称名号と称〜きう和泉千市
村立真寺第一の宝物なるべ諸人の去る所なり

霊宝は聖人御真筆の光明本及び唯円自作の木像なるべ

廣林山真佛寺　西流

月圓は郡大都郷
撰者根村とあり

受法院と号し高祖聖人の真筆真佛房の遺跡なり
開祖は日名異人　本尊阿弥陀如来　総結城
ちり混ぶ　御真作　弥名寺の
像を安置し
真佛房俗弥平左郎とく当国大都郷の庶民なり聖人の御門

徒となりてより専信受二の紛者なり秘聖人当国御勅化の
間に其身既に真宗の教純にして仏法を信ずるに師命に随ひ
もとくも未俗形を改めに此を以て仏法門尉の歩後
に駐と熊野權現に諸〜なるが權現の霊験を蒙り世に念仏
紛者の機とはなるまり　平左郎熊地治の子順信房孝純子仁治元年ようり尚妻
御修秘の法を修してこれを異仏に武蔵の電山源平左郎の法縁こ
で世ひにけるも真佛
上人の勅号をたまうしとそ　後に入る〜真佛房と号し弘長元年六
月十又日六十五歳にして終の大往生を遂らをうと去りより仏来
る孫僧秋すて平左郎真佛と稱〜相續〜てありけるを良如上
人東國御下向の打〜真佛寺の号を賜はしとうや

徳池山信願寺　西流

月圓は郡水戸城下
向平町にあり

蓮生院と号し二十四輩第二十三番高谷唯信法師の苦跡なり
本尊阿弥陀如来　弘法大師の御作とし
て相伝の御仏像

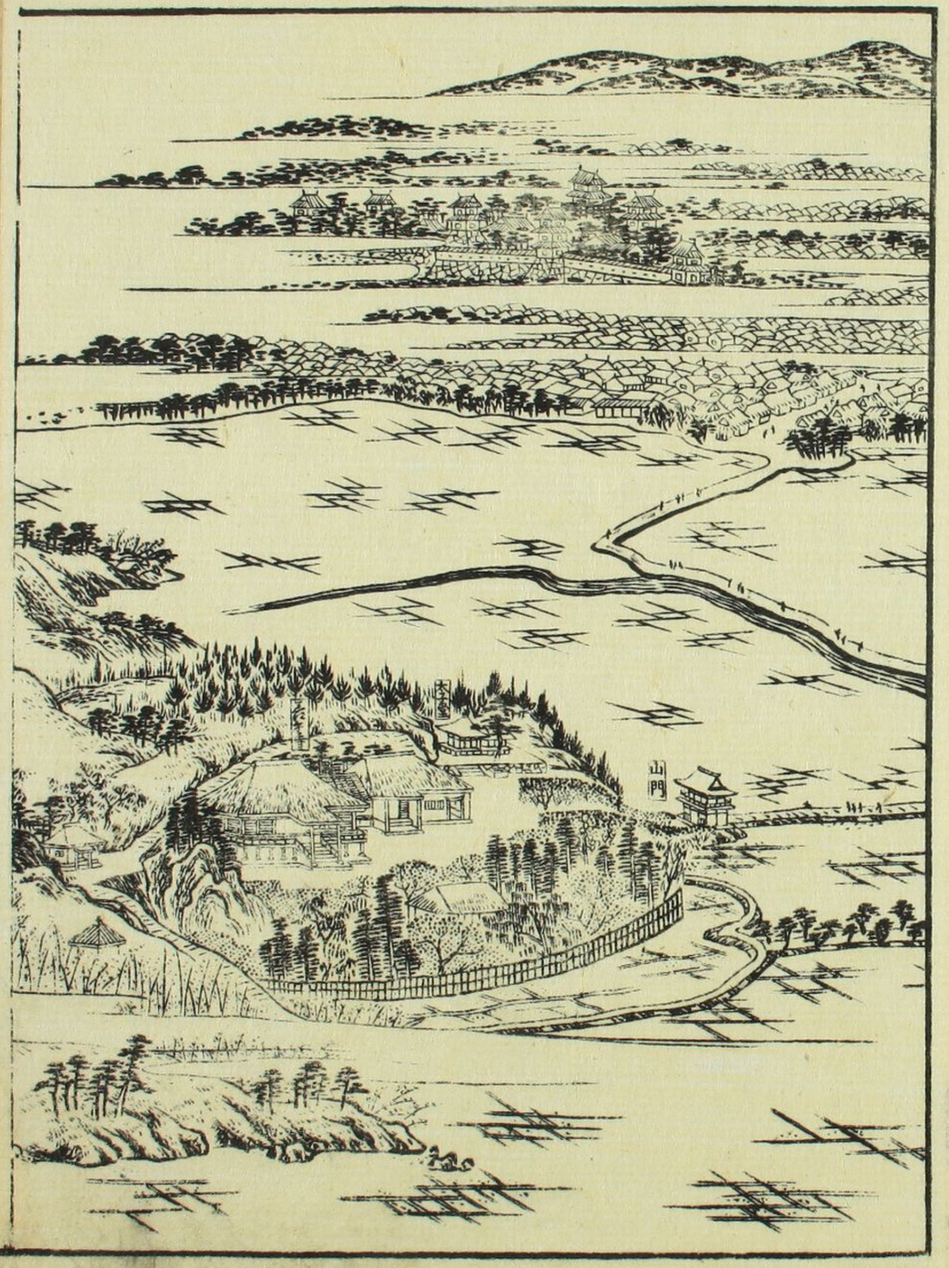
德池山 信願寺

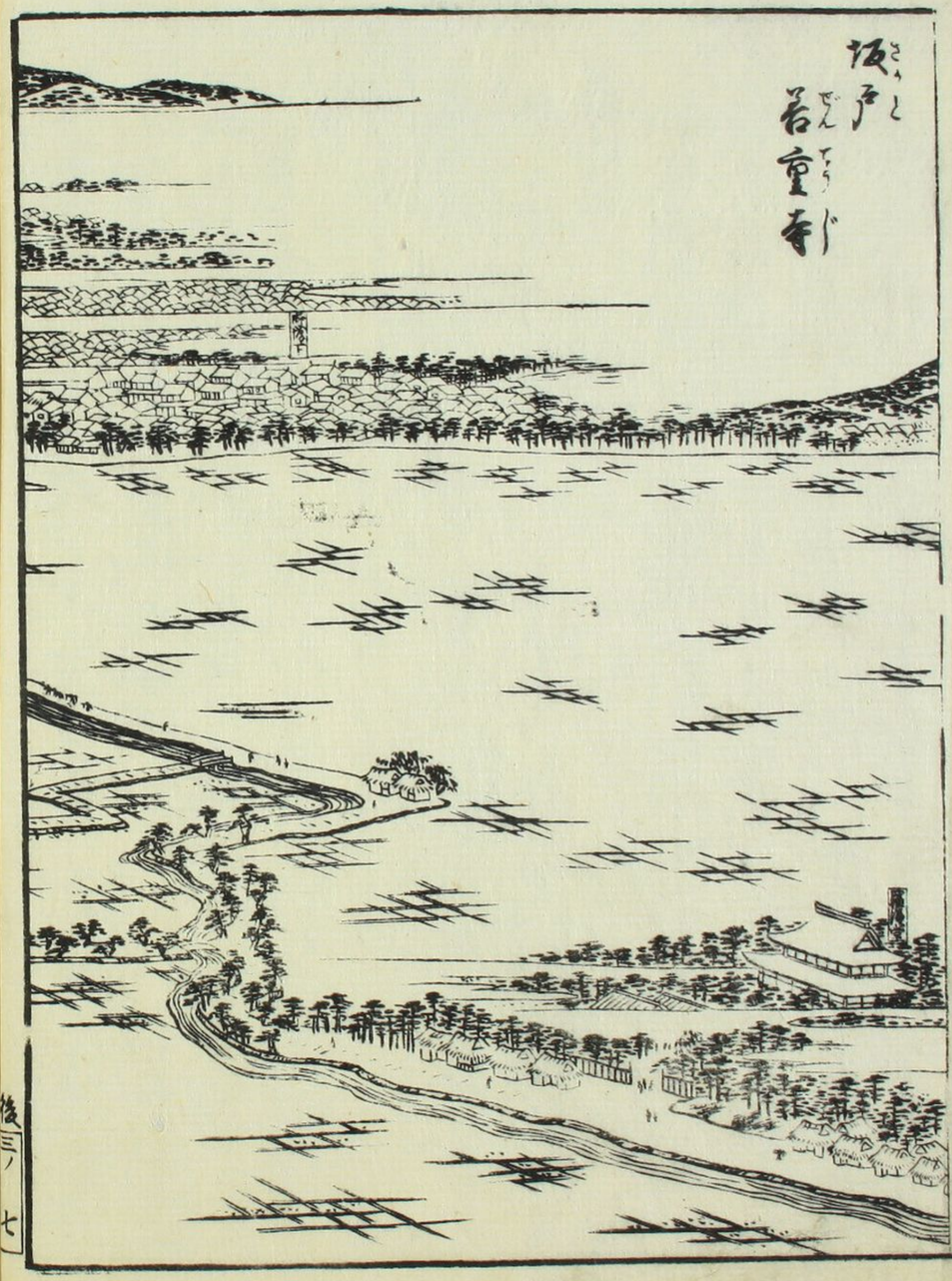
唯信房俗姓い當國保内の住人畑谷治郎信勝なりし高祖
親鸞御化導の時御教化を蒙り直ちに門に入て竟に專信念
二の御弟子となりなんぬ○靈宝高祖直筆の御消息
即唯信房へ下さるる一通なり其外代々上人の御真筆多あり

法王山若重寺 本流院と号す 日國水戸上町坂戸にあり

遍照山と号せり二十四輩第十二番高祖上足の御弟子
擇若念房の開基也○本尊阿弥陀佛 運慶の作又は春日の作ともいふ 坊舍三
區あり

當寺の畧記に曰く開山若念房の俗姓は平氏にして桓武
天皇の苗裔三浦大助義明の弟岡崎四郎義實の孫なり市
左衛門實忠の三男三浦三郎義重なりし又實忠和田義盛
と同心して建保元年霜月三日鎌倉を押して和田三浦の一党


大師堂
山門


坂戸
若宮寺

義重幼少にして聖人を負て揚川を渡る図

後三八

謀叛の咎討死せり時に義重卿十三歳なりしが同年八月十三
日薩州明神に志願のゆゑ諸で名帰るを播州に下し
給ふ珠賜げなる発信のまゝ
を見るに直に彼信を負て川を越名小豆えんや老剛高
祖聖人そもしく名かくてこれ絶に善提の善縁ありて
慶御勅化を蒙り聞法随喜のあまり御弟子の列に加る
名字に聖人彼播川のゆゑに一宇を建立し善重寺と号
し専ら弘法に給ひしが後の善念房に御附属あり
善念法脈に陸ひ教導無量とする所なり弘安八年十月十
三日八十五歳にて入滅せり

宝永の記事條の記四ひ大谷遺跡編に善念房の俗姓は三浦の一門長田義忠
方丈不齢の勇士なりしが常縁流に重人播川の法嗣に成り御教化と蓋
し絶に御弟子なりしに法名を善念と称ひ遠き教導を専らにせりしが中古東門郎に移り
の坂戸に時流をしのぶいまだ詳つまう其業を志ひ次第に衆に成て後の識者を待のこ

霊宝聖徳なる十六歳のゆゑる像

右此る像は古なの御自作にして彩色い重人なり
往古は国大山村慈願寺に安置せしを寛文十一年癸卯月やんごと
なき御方より当山に寄附し給ふ抑此る像は霊験あらたなる
ゆゑ遠く世人の尊ぶ所にして中ごろ廃絶するなり
ゆゑ今に始ひく間断者あり又元和元年九月十六日三人の廃盗当山
を襲ひしに忽ち利生あり
十月同隣家より失火して当院の本堂殿燈を四人ともに
現し給ひ時に猛火を消滅し給ひ
ひとなる故に不思議のゆゑる像なり

○播川の水源は当国筑本郡吾国山の麓より流れ出て磯部氏神の橋の
森を西に流れ赤い鳥城の南郭磯鳥橋の下へ落合絶に震が浦へ出る
抑この播川に入は往昔後条薫院の御宇長暦年中の比紫宸に播に
入る美少年あり此児をうしなひ人商人のゆゑに彼磯部氏神
の社傍神宮寺にやづり此児をうしなひてあるゆゑに其母なるものゆくえ
しるの約束を聞ゆゑ女心のゆくゆくて絶に狂乱し何国とあ
てなき所にさまよひ行ゆく当地へいたりなげ泣しも孫生のまの

犯人の
ゆくるる花
風の花と
さそふ
どし風
吹まはバ
花も叫て
静心揺兒ろ
むし」清ら
く其心
とゝ
る
犯女落花を
追て揺兒を
得る図

堂岸に彳佪して蛮水の際にのこりたるを見て此水中にこそ我子はいるらんと流れに掬発をむとしあけ暮つゝ河物狂しきさまなりを里人等あやぶまりけれどひやうくゝとこれを宥め其うゝを河へ走らくと若人等を如いくに里人等ひ合もろもろあまたの狂女を使ひ神宮寺にいたり侍りめく輪じしを執て掬みと出し逐さ見こゝにまがふかりし我子なりしかは狂乱の忽ち本に復し絶て久しき母子の対面もさぞあはれ哀ひあはれ理なりなり侍りし悪海ひとりの人ありて直ちに掬みの服をとりせ母子に伝ふ統業へこそ帰されなりこれなりして此川の名なるがしるしなり

長治喜八

東流　日曙日郡与沢村なり

先祖は平田与八郎と云代々歯村の農民なりしが武州妻女雑蔵こそ甚危急なりしかば巫医方と歯とを施る方法とを尽す其験なく次第に死期せまり来て若悩いたん方なく阿呼ぶ行こそ他の外の見る目も物うるはしくせめて臨終の陸徴を助んと貴僧高僧を求むるの類ひなりとゝ人ども元来歯世

其人なとかしく況や邊鄙の行田舎なれば是をいんもとる多能の養婦いまとゝく苦しみ堪ゝの種ゝの悪相をあらはし寒さにたゝ地とうち七顛八倒して終に眼を見えず歯とかみて息絶ゝ其ありさまを人愛相を失ひ恐ぢざるものなりかくてあるべきやうなく孫びかたのごく葬送を営ゝ村の傍ら家懇ゝ葬まゝく一族ども皆ゝ宿不仁帰りなるうさ化ば生涯の若根なるく縁一念の迷心よりて職士の羈縁をきざうふや其親より彼堤ゝ堀ゝ陰のごく姿を見ゝ嘯吟ものありて其数を悔まものの心魂を冷ゝ恐怖与八郎が妻女こそ逆寇となりて人をこるとうんとの人狂ゝ病ゝ入ば唯一人戸外へ出る箱もなくとりゝ嘆ゝ化ば与八郎ゝを深く悲ゝ稚ゝ仏に佛へ多他若をゝ〜て亡婦の善抜を吊ふとゝどもなをゝ幽魂嘯法の

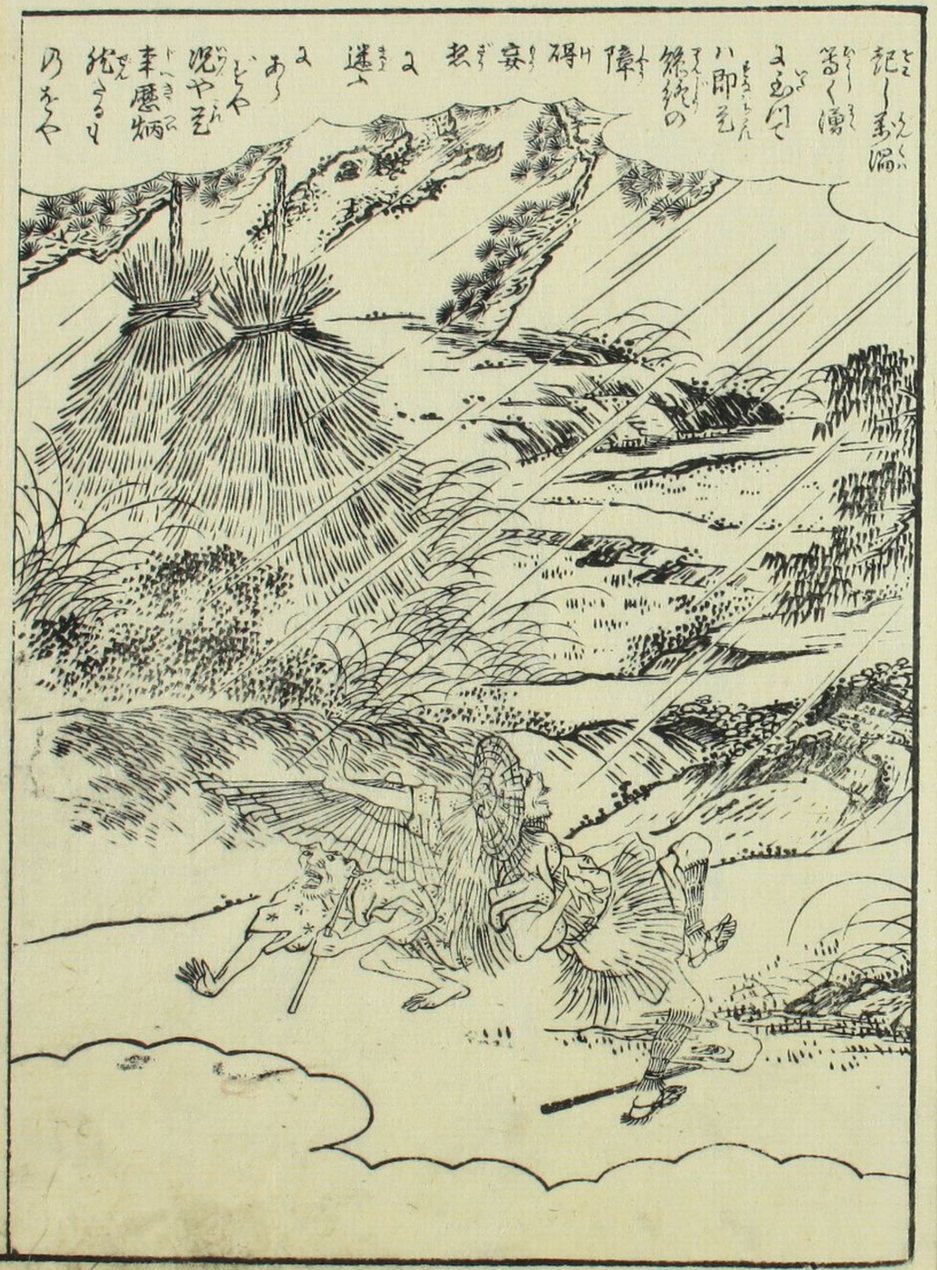
長篠

森八郎が

こゝ迄とゞく
長篠茅ヶ
はなひ勢ひ
てあらを埋め
む屍禄の業
やもとれば
幻うまくて
其ゆゑの花代
矢つゝ光や
陣屋なまる

幻路雑

女八郎が妻
死して遠寃
なる図
流涙の
人を智
慧にて
幽瞑の
ことを信
じる者
おゝ
猛き
うるあるとき
初て人間の
子母なるべし
若其逢浪と


紀し彩漏
笥く漏
よ色河で
八郎を
繼紐の
障
碍
妄
起
ゑ
逃
あ
況や色
幸歴病
統さるゝ
ものゝや

御經塚と

經石と拾人

圓

經塚の

樣樹い

年毎

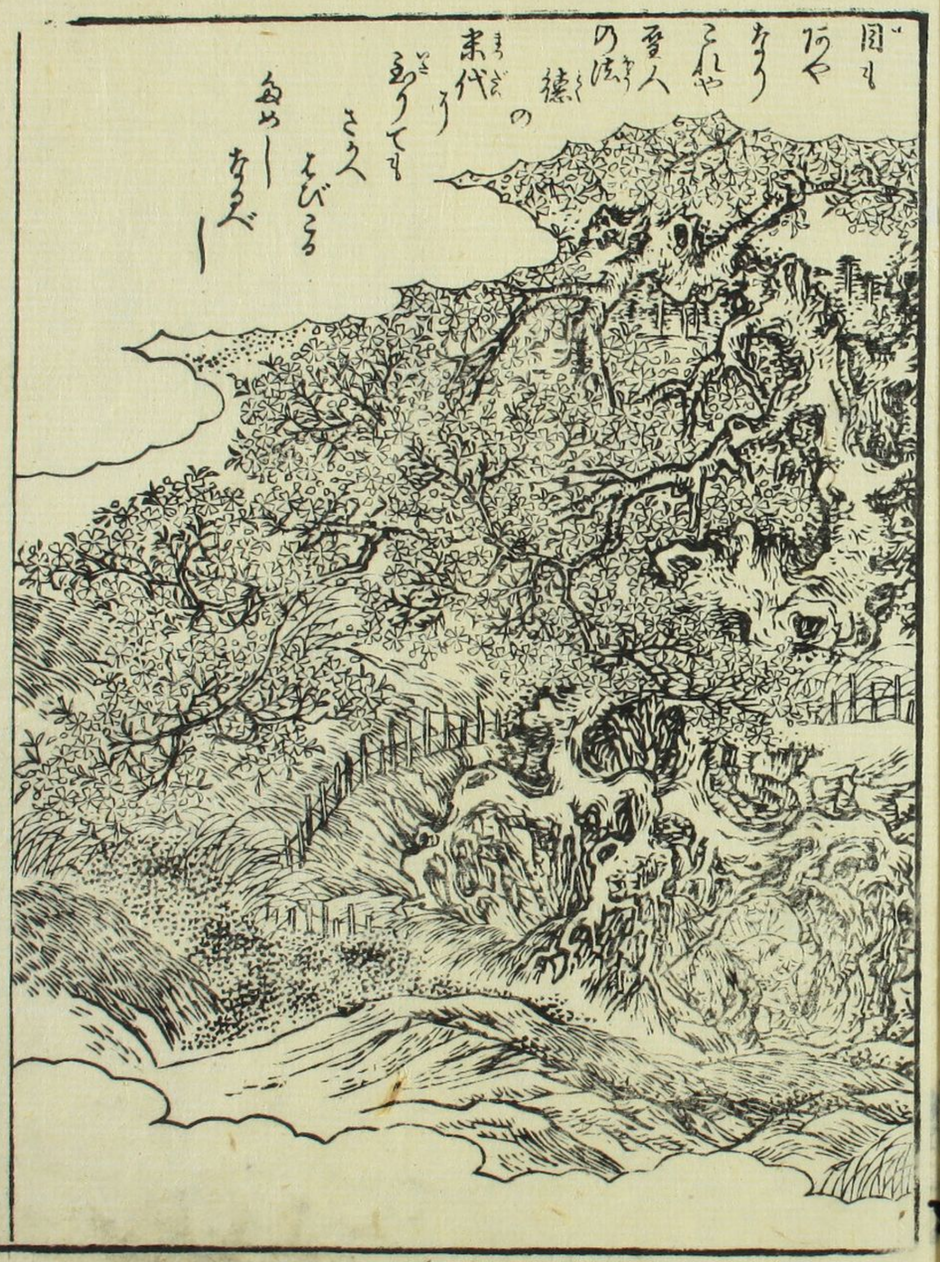
とび

うて

花の

うつ

見るよ



圓も

ひつ

ゆう

これや

貴人

の法

德

の

末代

ゆうて

さう

とびる

面白

しゆう

の契約はしてゆしも有るべきぞ是非とは実に此況高祖
聖人出國遊へ御化導の為往返〳〵給へくこの与沢村と
通らせ給ひ名が与八郎兼て聖人の大徳を聞及び〳〵ゆかんで
やがて聖人の御神通とげり事れはを懺悔〳〵大慈大悲
をこれ給へと涙と共に願ひる聖人始終と聞〳〵めしいと慢うく
がしめされかくるものをこそ涙度せどんべ我多年の功徳もみめ
泡なり如来の悲願もむなしかるべ〳〵と直に葬不なるり給ひ
多くの小石を集めさせ三部妙経を一石ありひい二字三字づ〳〵
書写し彼塚に納め念仏を念仏き給へ称ると与八郎其後義に金を荘厳の菩薩堂上
に現ぜく我ハこれ法が乙妻なり生執の妄念に引き惑溺
の速疾に成しミるを權者の利益を蒙り忽ち若城と変を

て天堂に往生をとるゆを得ようこれひとへに大悲聖人の恩
みて報じても報じ盡されど附をも附〳〵がこれ不なり
我家をこれて殊の現〳〵て告げゆるかぞと見へく義なぬ与八
郎奇異のこひとは忠さま葬不なりて何に成に幽魂
の形もを人に啼哭の契も変へざれば始めて聖人微妙の利生
を感じ信心肝膽に徹じ陸喜の涙せれあへばよく藤沢へ
詣で聖人に謁〳〵まり廣大無邊の恩徳を附〳〵あり
ゆゑも異に物がたりし此とい何年乙妻の因に成に出帰路
を定に草舎に入御ゆ〳〵せ給ひ大悲の教化とこれ給へと涙と
共に教ひる小聖人与八郎が誠心なるゆを感じ給ひ即ち
色を許容あり〳〵ば与八郎天に仰ぎ地にふして大に歎び
涙のまひ是のこゝとぞもとび跳帰り聖人入来の設をはして

祖父祖父に仕て高祖御入ありて其後い与八郎が家に宿し
給ひ終夜御勧化ありしかば与八郎い眞宗本願の名号
を受得し聞法踊躍ふ況実ふ雖有き信心無二の優婆
塞となりにかくてさまざまふ聖人を饗應ふるが聖
人も渠が信心淳厚なるを御喜悦のあまり撫へ給ふ而の
三ぶくの御画像と与八郎ふ授与し給ひ翌朝別れを告
て出立給へば与八郎御跡の慕しく赤飯をもりて捧来
し送り来り中根が原とて聖人ふ追つき給へ
ふ急きしまく箸を忘れしかばいかでいせんと傍を見るに葦
むし生えり即これを切てよく清めをもまいらせしかば聖
人渠が心づくしなるをめで給ひ心よくこれをきにしめ彼箸
を地ふさしたりしに我真宗退代ふ盛んなるらば此箸に根

芽を生じて花と咲しかば宣ひしふ不思議なるふ彼箸次第
ふ芽を出し今ふ茂りしとやいかでか与八郎い終ふ聖人ふ別れ
妻の悪念い却て色善提の種ふ成り我らごとの浅ましき輩
も羅漢御教化を蒙り弥陀の本願ふ遇ふる何の歎びか
色ふ如んさかりが此喜いふ深くつふて忘るべからそ即名
を喜八と改め報恩の称名を忘るるなく蓮国ふ念佛ふ
とやいふ喜八をして通称
○彼三幅対の御画像い中尊阿弥陀如来
三方三面にして光明の中ふ十二光佛
左若尊大師
右聖徳
右此三幅い聖人御自画御自
讃にて世に雖の所ふ二間四方ふ別堂を造りらひ色と安置ふ是喜八
が奇特ふよりて蓮国守り除国と祈ひ毎年會式の法ふ怠ふる

誠に在家の身にして六百年の星霜を累ね今に家名相續し代々
不退轉の信心厚く聖人の御遺物を持傳ふる事誠に目出度家運
と云ふべし
又
○御經塚ハ喜八が宅より又丁程南にあり即ち与八郎が老妻の塚なりまた女人成佛
の塚ともいふ
し中根が原又赤根が原ともいふ村より十丁ほど登方にあるの傍に五十間
四方程が間の一面に草原にて一草だに二年でまたれを生ぜず御番の跡と
いふ跡ハ今も文にあるといふ

こしき大神宮

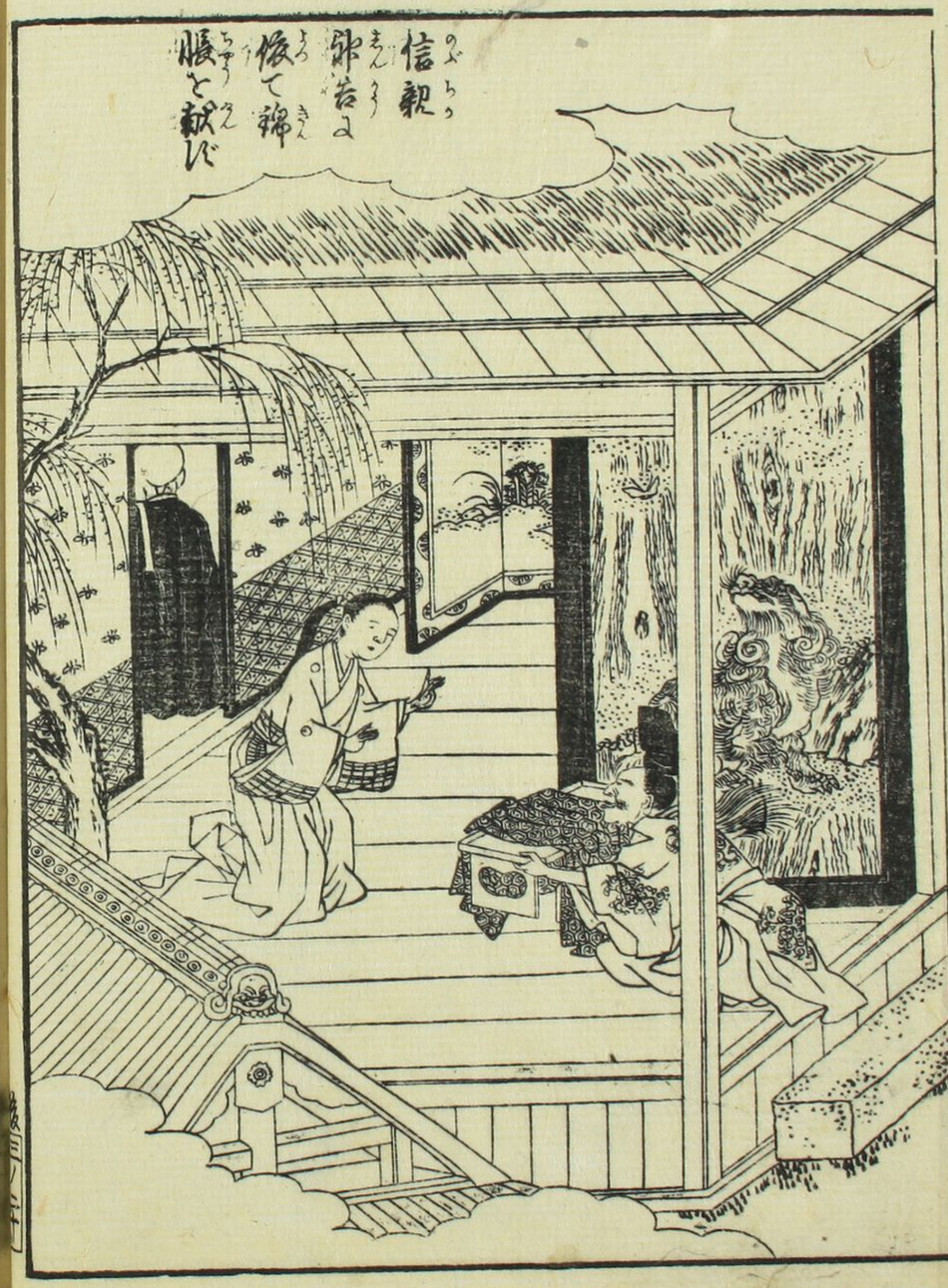
旧國麻績郎の鉄座ほしまた延喜式
神名帳に名神大月次新嘗

當社祭る所の御神一座武甕槌尊此地ハ鏡薩埵山に降臨既て
和光の跡を垂れ給ひ神代のむかし經津主神とともに豊葦原の中
津國を治め給へ爾より以来師の霊の神劔をもて兇賊を拂ひ魔
障を伏し我日本を鎮護ましますなれば萬民其恩徳のまもりなる
神風を仰ざるはなし我る小遥の星霜を經て嘉禄二年十月中

旬高祖親鸞聖人法臘五十四歳の御時當國稲田の御坊より當社へ参
詣ましましけるに内陣に於て神慮より聖人と深く佛縁し給ひ即ち
数刻のむかしにおいて衣冠いとうるはしき翁と現じ日々夜々に稲
田の禅室にあゆみを運びて聖人の御教化を聴聞なし給ひしに始の程
ハ門徒の僧侶も何心なく思ひなせしが日を經るに随ひ衆人是を怪
しそかく老若貴賤打まじりて群集する中に一際目立て本蘭地の赤
衣に烏帽子をかけたる老人にてそれ人とは見えざれバ種々の人にて怪まれ
らん下向の御跡をして見ぬべしと度々これを伺ひしかど門外へ出給へや
いなや忽御姿を見失ひ曾て帰り給ふ所を知る者なかりけれバ彌是を疑ひ聖人へ
かくと告まゐらしに聖人いとくより彼翁の神通を志ろしめされたれども
と門侶へハ語り給はざる事もあらじるなど宣ひて打過給ひけるに或時彼翁
聖人に謁し給ひ願くハ我に利力を授け給ひ法名を賜りて御門下に列ね

熊野の
弥社

無碍の邪
稲田の禪室
を訪ひ



給ふべ慶大の恩徳ありがたし汎仰たきうなりしうば聖人御乳を最快給
して其まゝ先をゆき給ひ法名を信海と書して与へ給へば翁は額に
の歌ひよえび聖人の九拝一下句をうるゞ其時日則剃髪の儀相を修へて
糸清く望く知恩報徳の礼をのべられ聖人も値遇の深うゝ
をめで給ひ自十字の名号を御染筆あり其脇へ信海房と御封屋の
御親とさうり加へ給ひ後の世のためしとく御坊ようそいとど免給へ
今稲田西念寺に秘蔵する名の什物さんたう名極楽寺にある名の連座の御教と無附の御筆と
の物境内の井水何とも濁りあるて常にこれを苦しと給ひ〳〵よこの日
信海御房やさしうい我も又宿願用髪の歌ひよ我庭にて七ツ井とて
清冷の水あり其内一井を聖人寿附〳〵きゝんと折ひ給ひしよ石
思議や其夜忽ち御坊の庭よ清泉涌出せり 今稲田御坊の庫裏井戸の内即是なり 加ゝ
聖人曽てきよの写像を自彫刻ひ給ひ御坊よ安置せられしよ信海

房戸帳を捧献ありて聖人の恩徳を報じ給へ（今稲田所坊の寺に蔵る戸帳別記）是此御神の
枝葉鎮護の霊祇なれば聖人の徳翠を見て和光の方便を仰ぎ給へば
あるべし　扨又其後寛喜元年古神宮の神官尾張權守信親（信俊神の嗣孫也）
寺の来　又託宣して曰く我此所稲田に居る聖人と云人達徳の知識
を帰依し直に御弟子となり法名を与へ給へ　不願濁世のうきしさる
戸帳一掛及び清冷の井水を寄附せり　伝聞やはり小我檀上の錦帳を
拝して稲田の御坊へ献じ若是を流せんとうべ七ツ井の其一ツの既に
先達て涸渇し彼地に清泉涌出せり　勢々奇瑞あり　御教彩
宜へ　せ給へ　そ信親大に驚き即時に神殿に参りてこれを何人に御
戸帳の内に献じて法名釋信海と書る切紙あり其上井水の意
著明信親弟と青矣の恩ひとしかれ霊験あるこい何の疑ひうべ
と未渇しもせざるを忽ち聖人とる信し　速に御弟の錦帳と稲田の御

坊へ相承し遂に一宇あり　幸ども物語りしはべく御弟子となりしかい
法名を順信と号し鳥極無量寿寺の寺勢とぞ繁り　上来は西念寺なり
寺号寺とのみ
仏像を舎
換て記し
○慶徳寺は天言宗にて当社の別当なり　当寺は聖人御真筆
古神の霊像あり　赤童子の御新とて御裏書し御日筆なり　又古神の
木彫にて聖人の写像あり　此三体共の御新と称し先年古神宮信親
海房の霊像は此餘西念寺に聖人御真筆の信
○七ツ井は流当時の名は宮下の内の志あり　さや　ふるさと　此上は井之
本社より寅卯の方二三丁儀あり
○栗石本社より辰巳の方二三丁儀あり　相伝に当社は古神の御新にて此所の
齊嗣のきりは日の年と寄らんと宣ふとや
○当社年中御祭りもとべて七十又度しの人中より常陸帯の御祭へ別当
神宮寺の不勢なり　○後松樹　云常陸帯の明神の祭りの日女のけさ
うの人のあまたとりて名ども布の帯を出つけて神前に捧げ三男の
名書　さいをのづつ　裏へ入れ女さしとりて男子はやがて出くなる
云そのゆをひとり出べしこれ此こそ後とそよりる歌

和漢のこゝろみとくなるひとち事のかてどうもあるまんとぞこそ人
○世よ稚ごちをるよかゝまざちちの人多い宮社を祈い我秋津洲之眞中の
御祈りれば八百万の神こも先宮社よりまつ治ひく後諸國へいうつ
治めとゆを祈の御教とく
宮居をの所ゝの神もこゝのまちぜゝひうまをるる
とあり云れよりしてかゝい云伝人さん
○高岡の原い山をひの東の方よりあり又大和よりは名あり
○ちべく此うゝを藤浦の浦ちの人又ゝ此うゝい藤浦より一里餘も傳
あり良玉集よゝ人ちべ
まうんばかゝの浦よちち出く浪のちるをゝあまいうゝん

御堂宝満寺

西流内陣　下総國銚子の湊にあり

宝満寺い藤浦明神より息極明神へ出をれよりひちち京ゝの宮をもべ
ちべて約弐八里ゝて銚子浦ゝ出る番元明神へい宝満寺より又八里を
此間漕路い大ゝ砂礫ゝて甚難所ゝ藤浦大松津より松とや
ちゝて約べゝ宝満寺及び番元明神の華法ハ下総國の郡ゝ委ゝ出れ

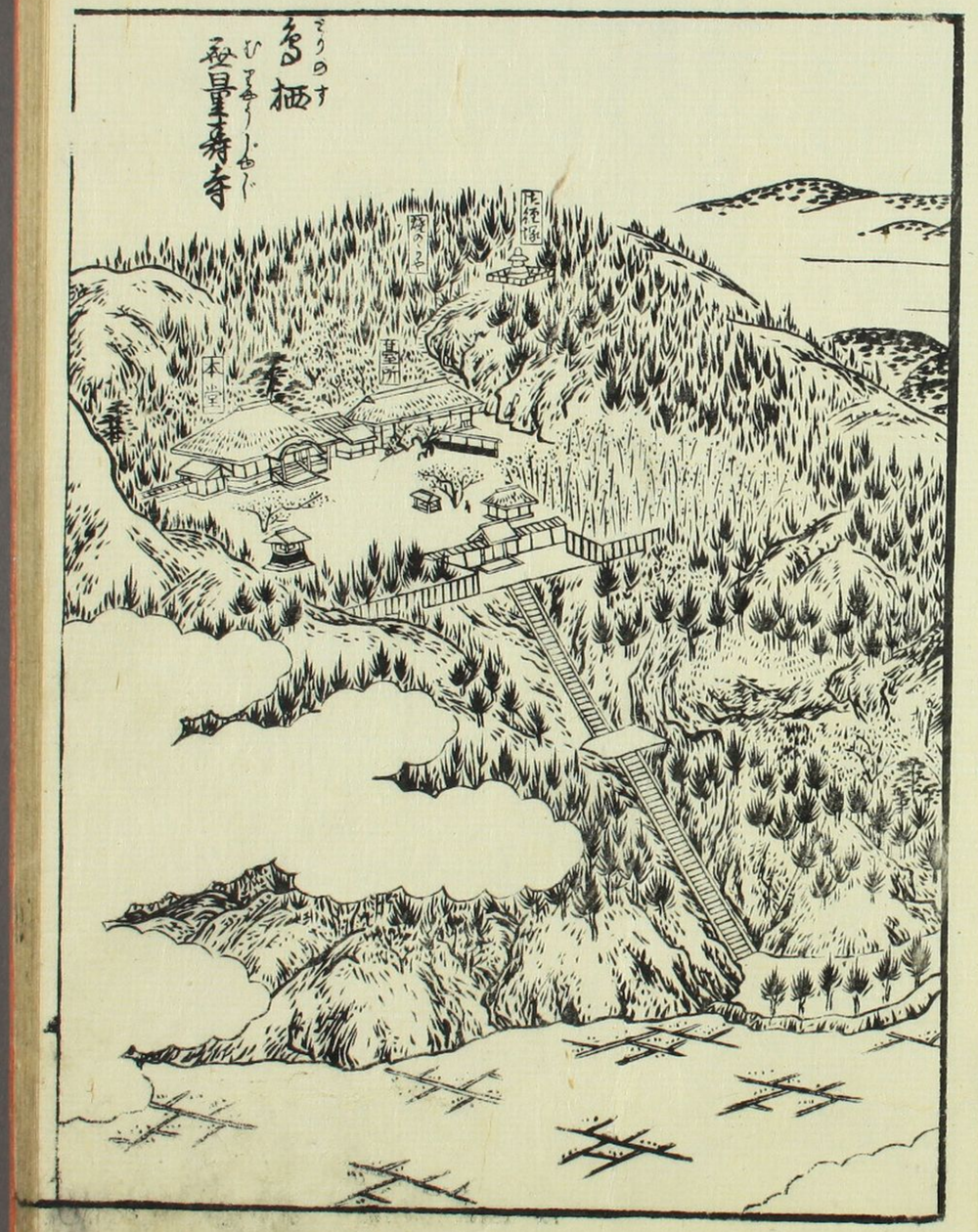
簡丹極楽寺

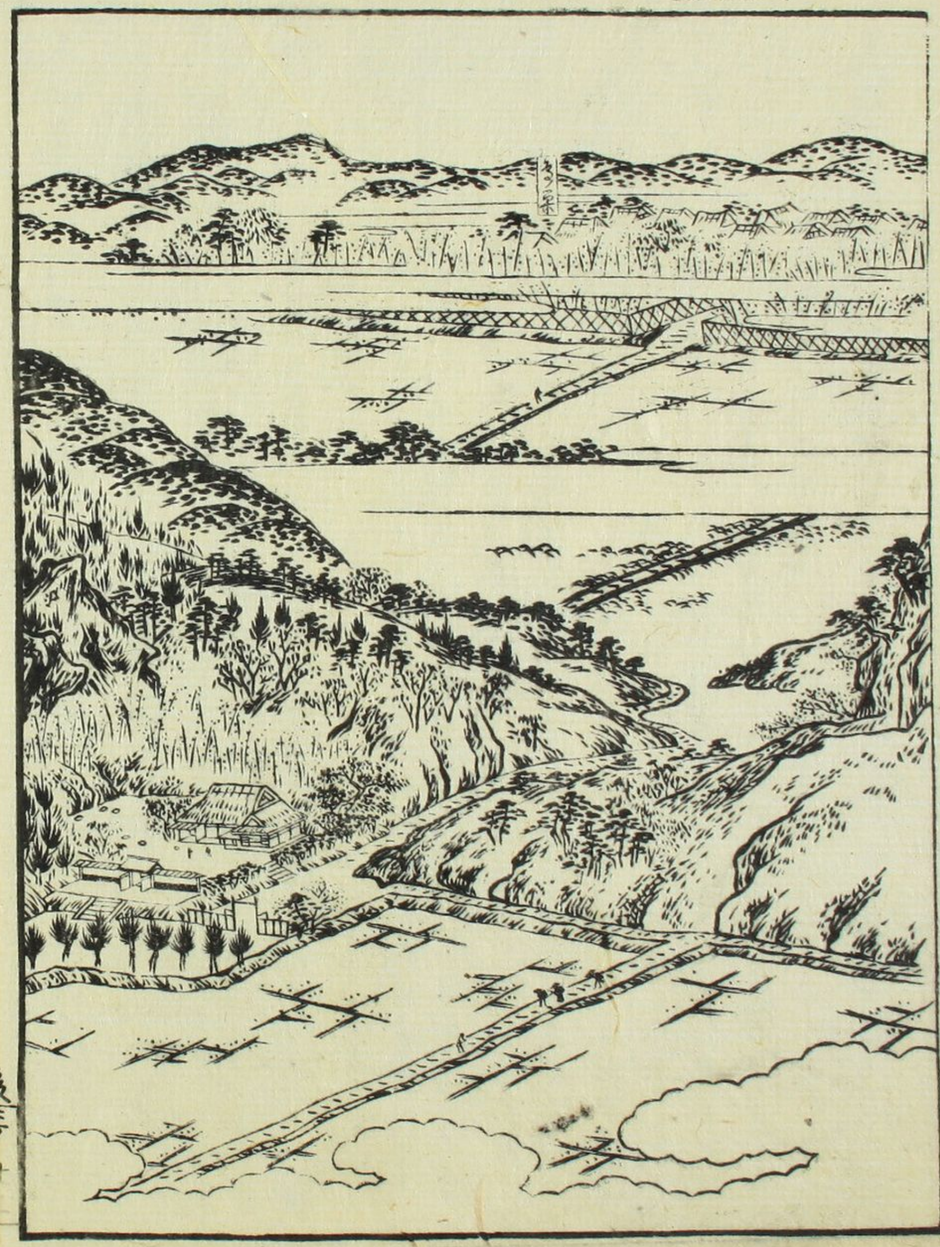
真言宗　常州藤浦郡簡丹村にあり

尚寺い往昔宗祖聖人御化益の地なりとゝ○什物聖人御
真蹟の光明寺并阿弥陀如来の畫像光明の中ゝ六字名号及び
其外聖人の御本像御法名をそのせられ
○息極明神藤浦より二里宮社い聖人曾て一百ヶ日の間参籠
ゝ治ひゝ御四跡ゝらく息極より千八丁簡丹村ゝ出る人家ゝ彼息極が
西ゝあゝて深古宗の一院あり往昔ゝ祖此地ゝて御勧化ま
ませゝ比佛ゝ供ゝ治ゝ
盛んなるゝ法ひ次第ゝ
もて残ゝこゝも本ゝいづゝも三ヒ天だうもゝじめゝ人させ治ゝ
併ゝてゝ也ゝもるゝ
心をまゝ
華ゝ
ゝふゝあゝ聖人書写ゝ
○巡路い此不ゝ又藤浦へ戻るゝ

光明山無量寿寺

西流内陣　日國日郎
多極さま


多栖
極量寺



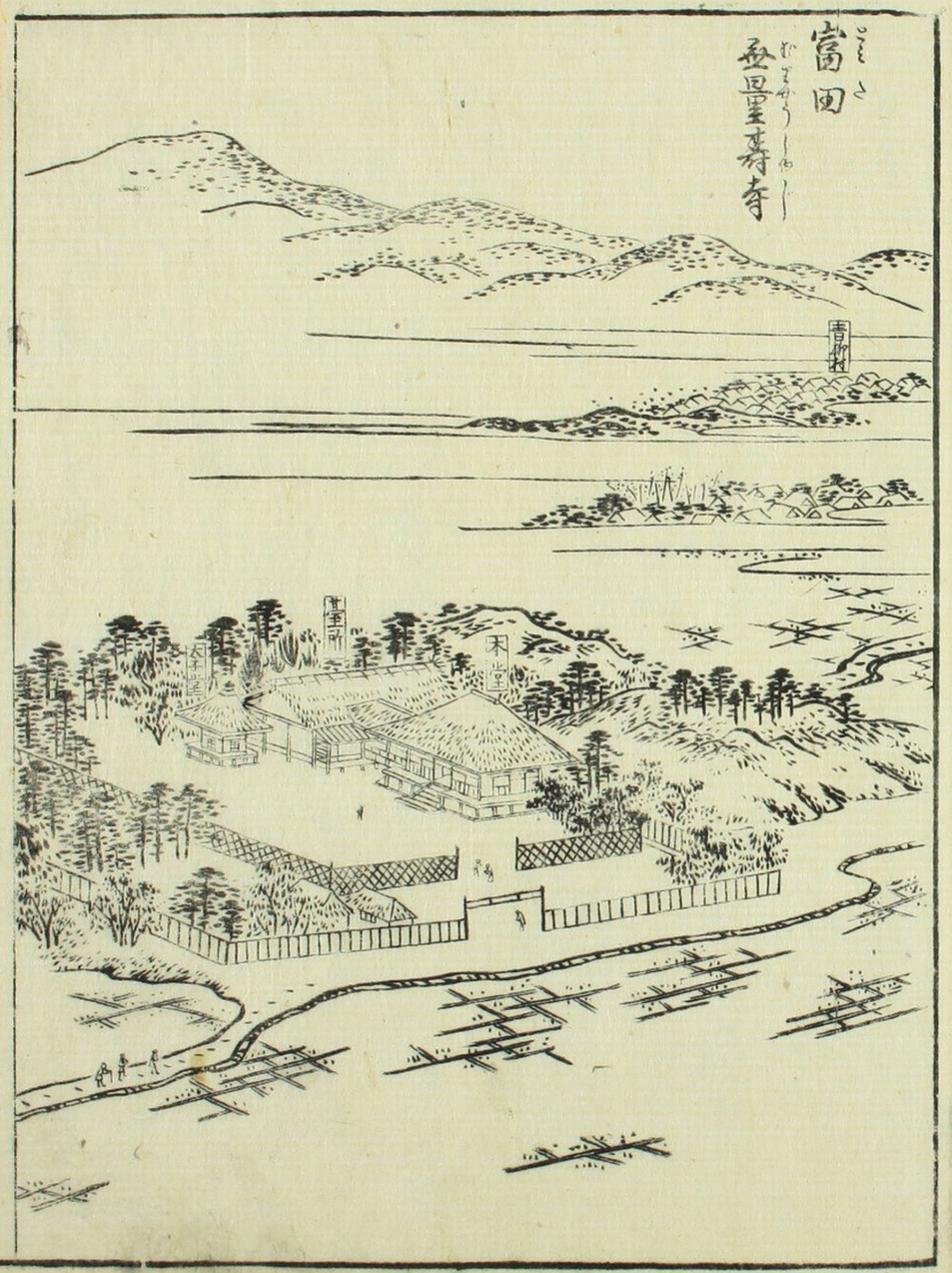
刑部が元妻
成佛して般
人は美き八図

十月の初め
百十手の指
さん不必を
送ふすは
無人の美さ
成佛の相と
まえーも
人はぞひゆび
さん百ちん
いこしや正
美のまさ

二十四輩第三番聖人の嫡弟蓮浄順信法師（俗姓蓮浄明邦の孫なり）
相続の芳跡なりて曾て高祖三ヶ年の間寄寓はし給へる
の霊場なり○本堂阿弥陀如来の尊像は聖人の御自作之御
長二尺三寸
当寺の盛衰を尋ぬるに往昔大同年中の開闢にして無量寿
寺と号し法相の宗風なるき梵刹なりしが其後幾百回り
星霜を経て下根の僧侶次第に怠惰の掟の教網を紊へ者は
く寺院も稍々傾き及びなる文治の比当国の刑史村田刑部
と云る士志願の余あり遺構なりき再び営繕し佛心宗
の道場と成せり然るに刑部が妻女懈怠のあるを大に悩給ふ
あしくなりし程に即当寺に墓地なるが豈抑も宿世の因縁
の業深くして懈怠顛倒の一念忽ち億劫の迷鬼と現じ

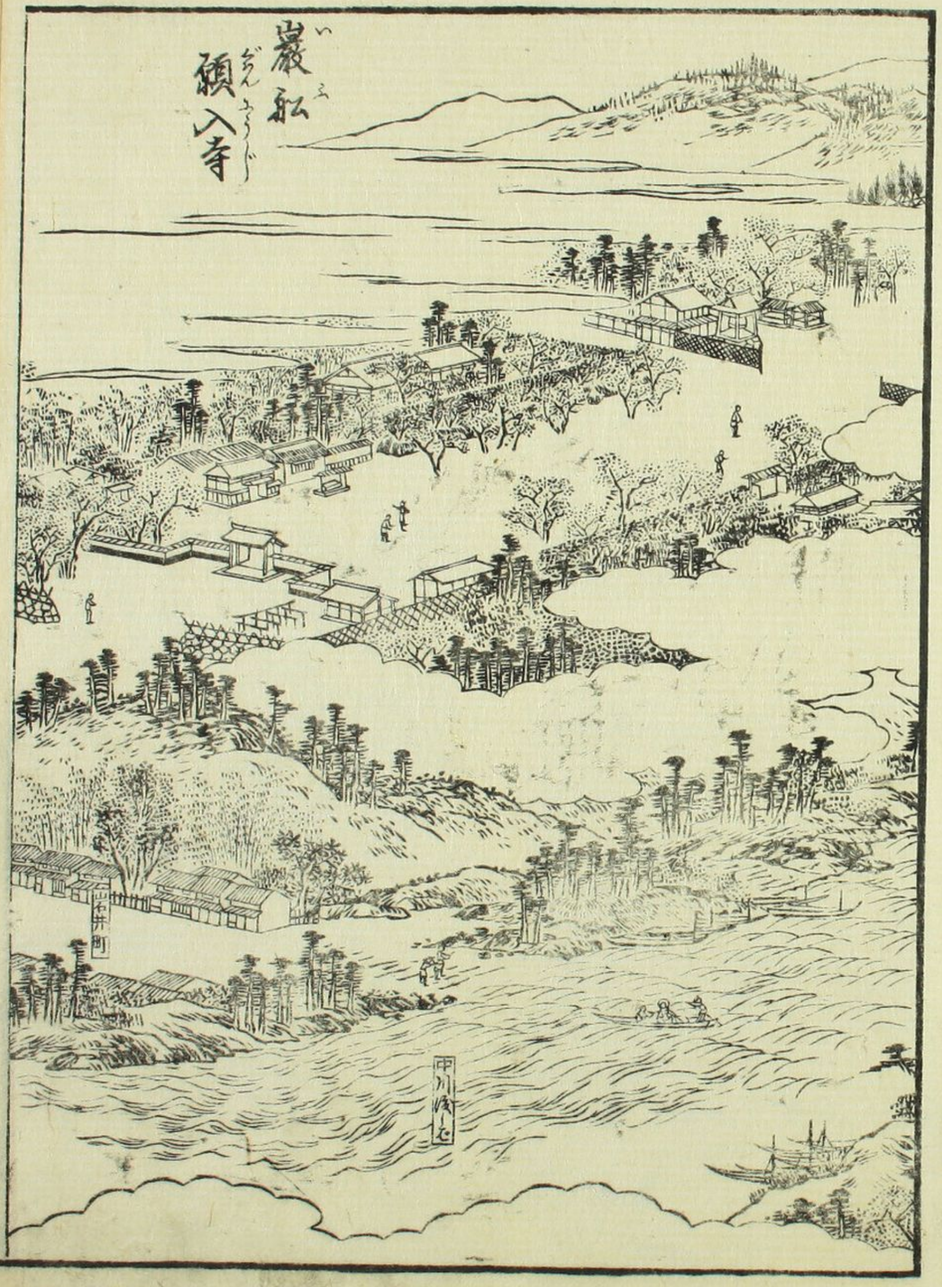
夜々帰叫ぶ数声きこえり村民これを異者大の恐を
無量寺にうつさそ産女て人化生ありとつゝぶに誰一人
信ぜる人なく後ハ段々傍ハ富までも恐をまさらひく近
くより々れば彼の荒廃の寺院なれとも村田刑部尤
を大に悲を追福供養をまぐ方りとゝ人ども
々きるく楽じ炉ひなる形しも（兼久二年の秋）宗祖聖人当国稲
田の御坊より蓮浄へ社参はし給ふの数ゆて諸人その徳
行を仰ぎ頭を化益と蒙る者おるゝ及ぶまく相共村田
なとゝめ聖人を屈請し何卒願度の化益をもりて幽魂
を一時に救ひ給へば一境の既び廣大無辺の恩徳なん
と折願きるに聖人弘法の御願はしとゝ人ども十方世界
構取不捨の御誓願に彼一人洩んないと使ゝく抑ゝ

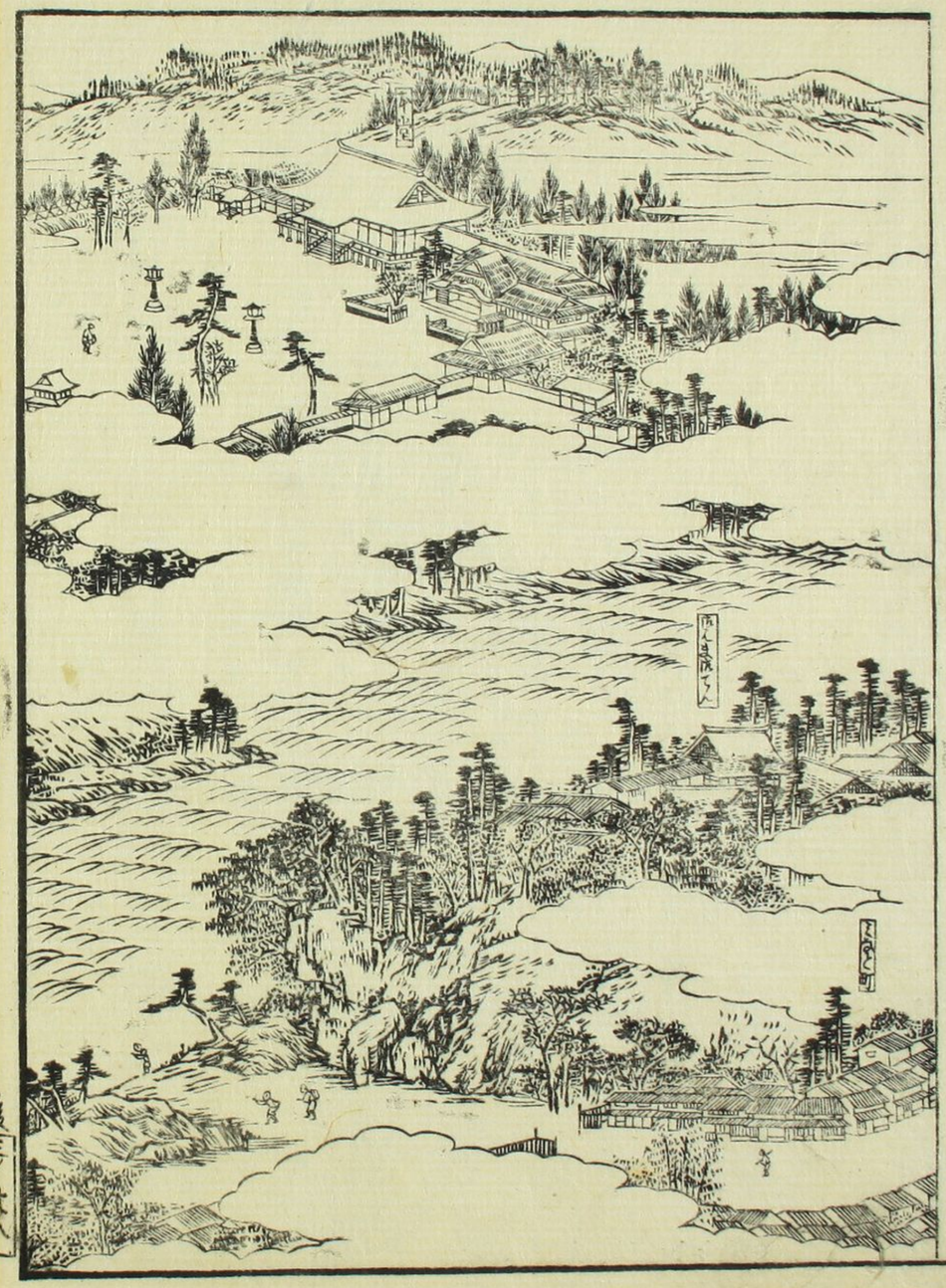
即玉趾をめぐらし給ふの小石より三部の金梵二万六千余
六百餘字と恵くまづうつし書写し給ひ彼境内に
鞍附の称名いと懇に唱へ給ひしうば權者の奇特著明
く其験よりして遠寺の若妻の病として止まりたるを
らび刑部とはじめ村民多く彼妻女の生前の姿其まうう
一斤の紫雲に駕して西方に飛さりぬこ一日に先と変化
む者不思議のたひとうに中にも刑部い既に霊験に
信心肝に銘ぜ時喜の涙こぼしあり名るが幸当時
徒るしば何とぞ聖人を彼寺にとめまり御教化とも願望
ぜんと村民多くこと小聖人の御袖にすがりこ俗名小聖
人つくづくこと云ひ有縁の衆生い化と給ひ安く貞廉浦へ
の往返や、程を名れば我婚くい此尼院に寓ひと即四名

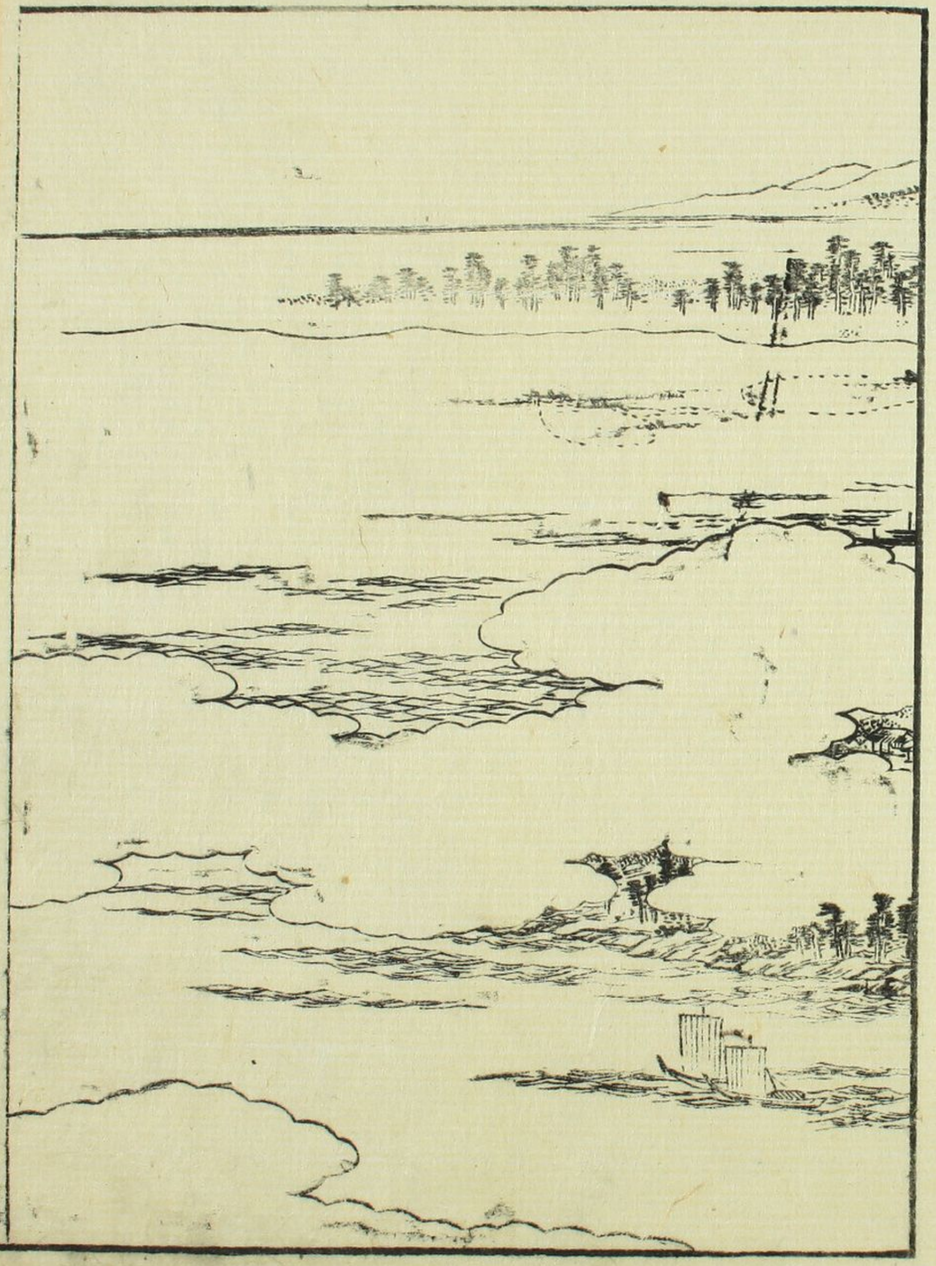


又壽の字を加へ無量壽寺と号し竟又三ケ年の間当院は
御勅願にて〳〵名をとなん 当寺三年の御寄寓い稲田御滝留十ケ年の因なりとぞ 此時の御歌又
弥陀たのむこゝろをおこせとて人のかりる次安と名づけたり
其後康治順信房へ御附屬あり
又当寺を相兼給へり 大谷遺跡孫子は順信房は信親の一子孫藤次郎信寿光の心にいたる聖人彼に入て西海を化しめ給へり聖人の御弟子なり順信房は栃州治下郡溝口佛性寺に其遺跡と云始て家を建て後素と称
法祢の本像 聖人御姿 釋信海御法名 康治明祢の法名聖人御弟 ○宝物 康治大明祢
勢屋の御真筆 御経塚 村田刑部の乙妻の塚又女人成佛の墨
上又図とる所の聖人の像〳〵書写の御経石なり栃州大坂上後藤明治所の役釋惠教の山寺なりて御巡錫ありて彼経塚
又拾ひて拾ひ得〳〵ときれを発せらる
光明山無量壽寺 東流 日國日郡富田村にあり

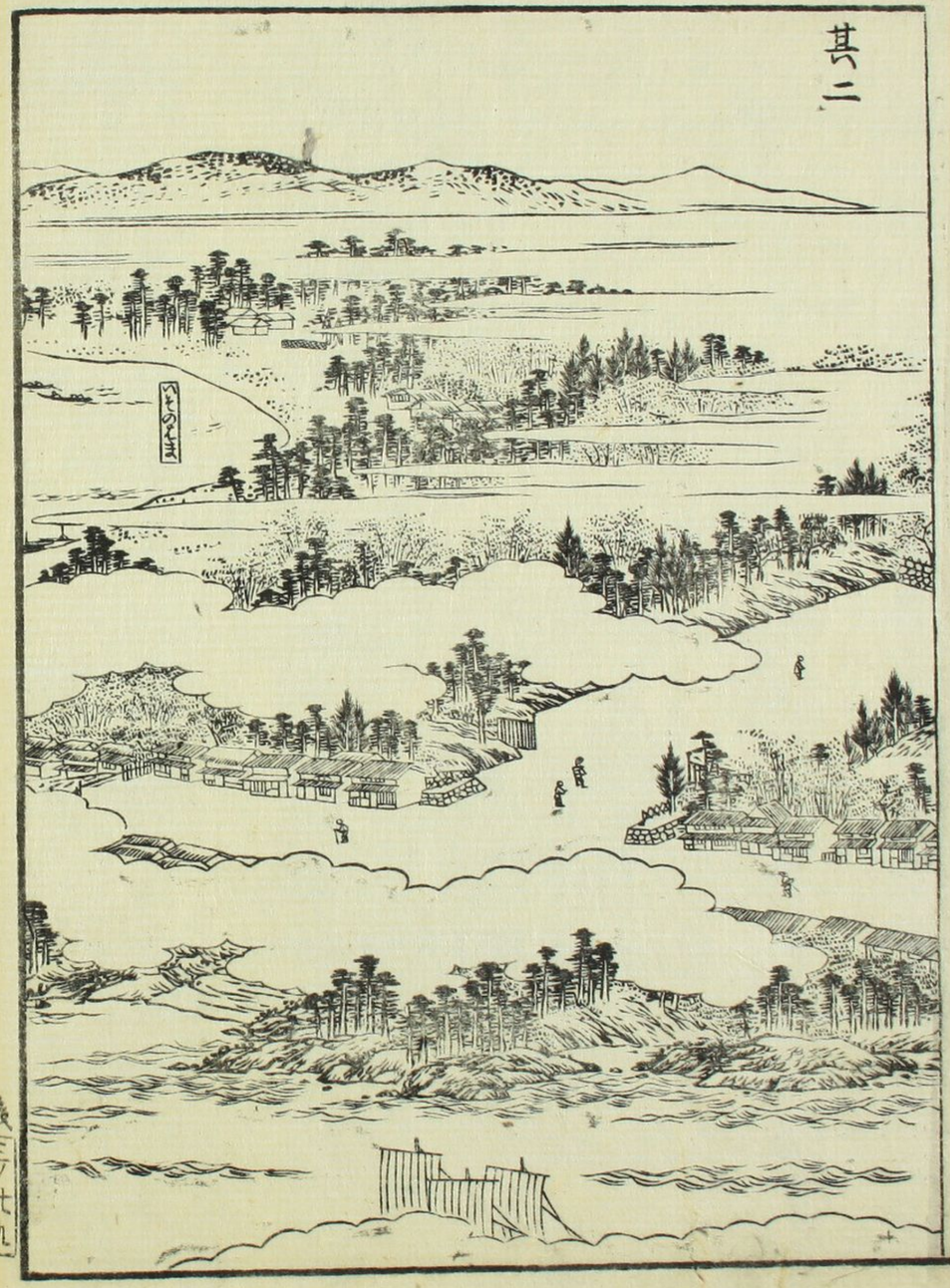
当寺は鳥極無量壽寺より分寺にして二十に軍茅三番
順信房の開基なり 順信房の俗名康治明祢四びるる極の幸下にあり ○什物 高祖聖人御
真筆の光明本尊 法橋の名号 明又信海房の親鸞と畫給へ名なり
巖船山願入寺 東流 日國宮田巖船にあり
当院は高祖親鸞聖人の御孫如信大和尚の遺跡にして当
國第一の大佛場なり 代〳〵御連枝御役職にて寺格最弥高
○本堂十五間に面本尊阿弥陀佛 春日の他流の義 御他力
当時國君の御他の如信上人の本像を安置し坊舎六ケ寺あり
傳又云く如信上人曾て奥州大綱の東山に居を占給ひしに
光即祢入寺の盛場 御勅願に落入者郡國を傾け徳行を仰ぐ軍遠
近の隔なく崇敬彼禅室をうるの三十里 坂東五六丁一里をいとう 西又石の川
て金澤と云る所に柔若と云ものあり 就中本願の名称と


巖松
願入寺
石井門
中川渡し


西ノ浜ぜんこう
ゑんこう門



其二



如信上人
往生を
あらわす図

信受し知恩報德の男ひ洛うゝび後ゝ正安元年己亥の冬朝
冬廿日あまりの比信上人を已が草菴ゝ屈請し豆腐聞法
の化益を蒙り且い朝夕の給仕をぞ[illegible]ゝ小豆とうしゃ
上人聖ゝの正月二日より市心地例ゝうゝび打伏ひ編ゝ世の
警塵を拖却し長附の称名專らなりしが忽ち異香室中
ゝ薫じ音楽窓外ゝ聞ゆるゝ二日二夜人の二根を穿ちて
同彫白しかくて上人月記日正知正念にして称名の数ゝ絶とゝ
大往生を遂し後ゝ(御年六十二歳)此ゝ抑て第一回第三回の御法ゝ
を京師ゝて執行ひ第十二回い正和元年ゝなりて世後ゝ甚
不年應長元年癸亥年冬の比覺如上人御奮跡とゝ成せ
給ふゝ去きりゝ絶ゝ関山嶽重の雪を凌ぎ江湖万里の
氷をまうう遠くうの金澤の芝屋ゝ玉趾を寄らるゝ諸方の

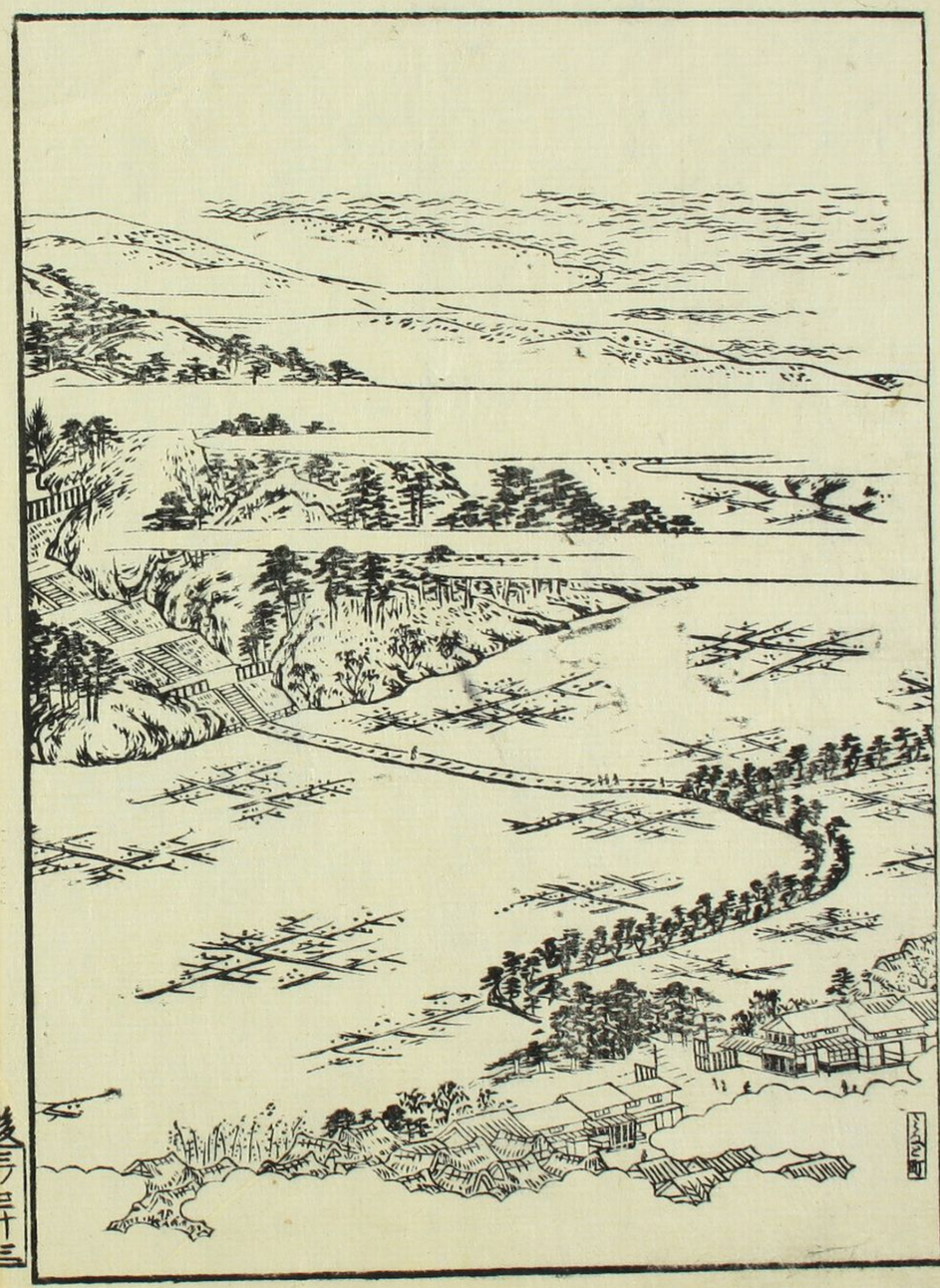
門徒を催集給ふとゝ成ゝ退轉の佛ゝを宮殿ひてをしてゝ
ゝ大綱の基趾ゝ詣ひ即遺教の後のためゝ一座の説法
を設け給ふゝ涙ゝ感懇鄭重なりしゝとゝや(以上最須教重説ゝ)
中古彼大綱の民屋月國白川郡行願寺ゝ移ゝる面へうりしゝば
大綱い即荒蕪の地とゝなりて今い古宿と唱へ申掛ゝ信上人の
遺跡願入寺い上人金澤へ移き給ふ後代ゝ相續恵ゝのりしに第
八世如慶師の御國中奉教ゝて堂舎悉く兵火の為ゝ
焼亡とゝ成ゝ大綱を退き當國へ移りしが月十二世如正
師の御文ゝ月國久慈郡久米村へ移ひ寄ゝ十五世如高師の
の御ゝあゝ門て延宗元年の比
當國の大守かゝる霊場の日くゝ衰微ゝ嘆んゝを傷ゝ恩しゝ
喜捨の大功德を真ゝ移ひ即久米より今の宮田村ゝ門

寺院佛閣多くあるなれども麤末にして再興あらせられ京師にて
御連枝惠明院如睦僧正を請じて御住職なされ寺領
三百石外に毎年黄金二百兩香華の資として御寄附あら
せられしかば信上人の御法德日乃再び中興のごとくなる
來國に曜きなるい誠に多なるとぞ
○靈宝には宗祖聖人御自作の御影
二十枚牽牒 釋宗如御筆の色い御本廟第三世覺如上人之御御坊(御十四の御)
奥に正慶元年壬申年四月 ある祖の御門弟三十枚牽 三流相承の人々を連署し給ひし記也
五日親筆釋宗如とあり
○如信上人の御廟い今當伽藍内乃金澤にあり云々
國君より坊舍を宮築し給ひ新田二十石を寄せ給ひしなり
○當國の名產淳竜い此道の涵中にて獲ひ諸藥に用ひたるなり
ありとなん

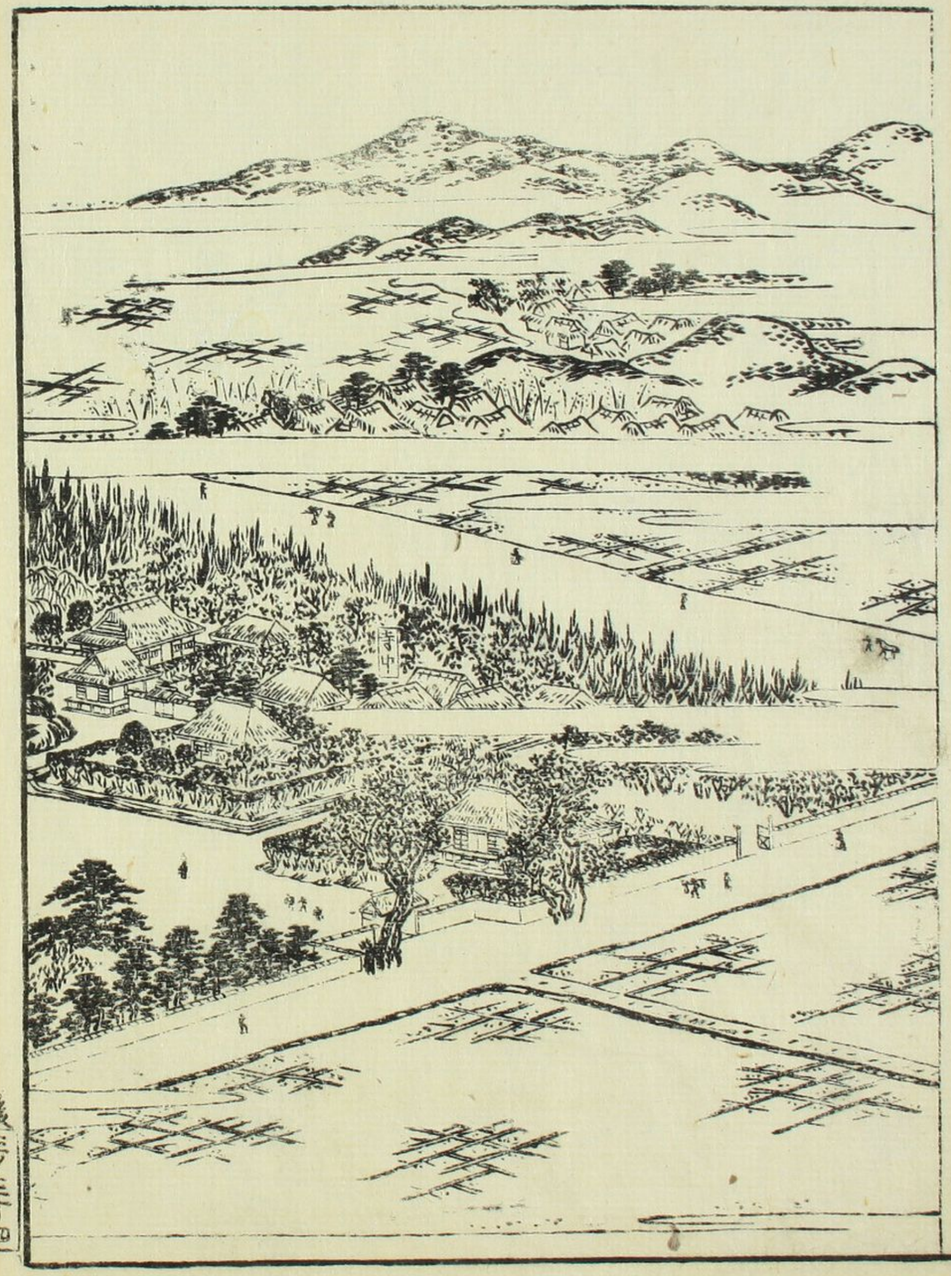
衆宝山淨光寺 西流 日國那河郡田中鈴山にあり

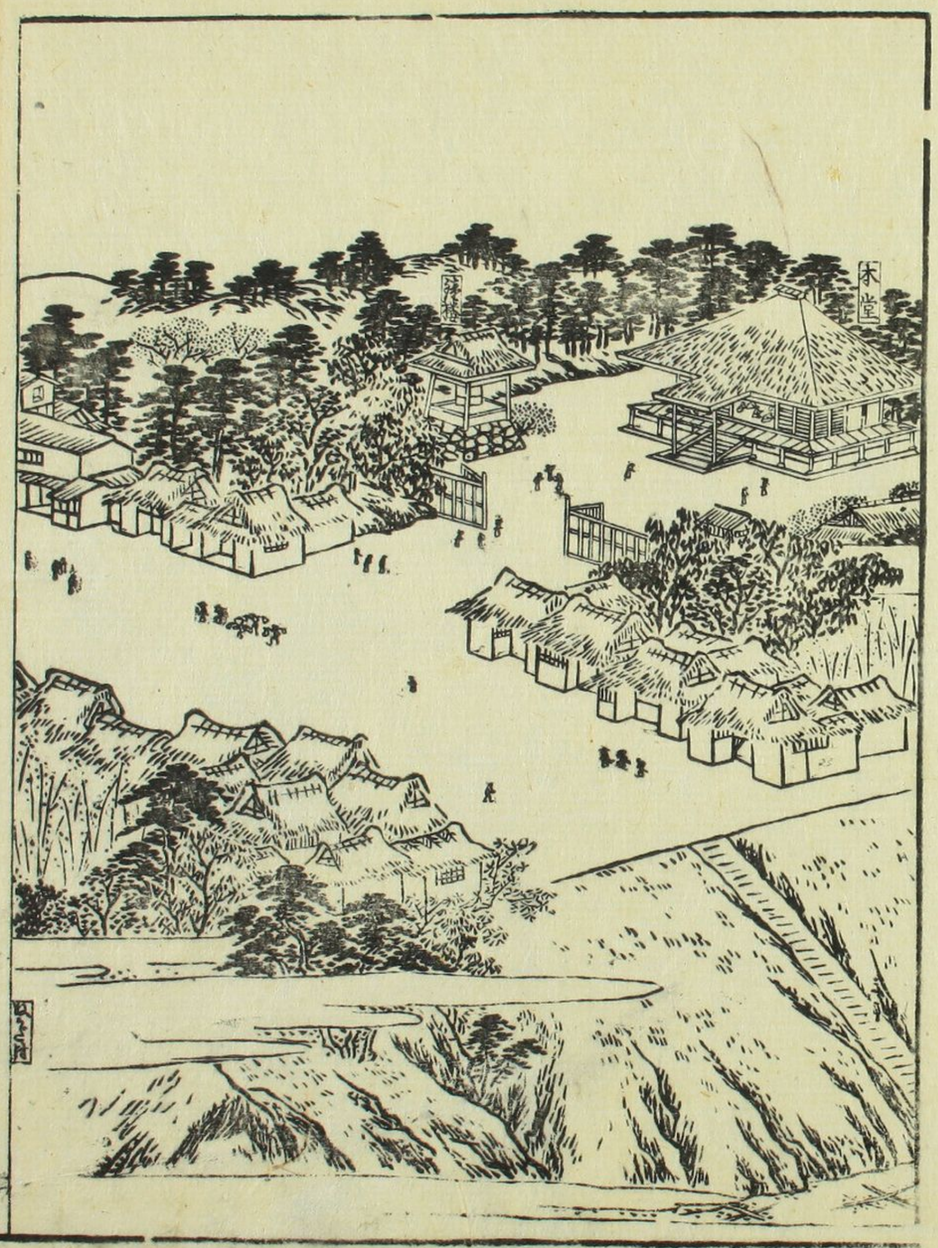
當山い二十枚葺茅二十一番目にして國唯佛房の開基なり唯佛房
當國茨城郡吉田川に一宇を造立あり吉田御坊と
が中古當境に移せり然るに開基若義にすれども佛國
を山上へ引うつしと遺蹟い即山の拔藤にあり山下の拙門い
弾内匠が造化せる所なりと云 世に花弾内匠なんて人の名と心得るい
人内匠に如ちるぶ花にれを蒙りて當方嚴
大和をれて稱し 弟振い河内の名を蒙りしの新
孫陀如來 惠心僧都の他流行義堂の室にれを安置にしたり 宗祖聖人の真影 御自作にして自照
僧舍に區あり ○什宝御繪傳に卷 日本三部の其一方り傳 文の宝如上人絵詞法服之
開基唯佛房系圖 以上三冊共修復い
國君より御寄附なりとぞ
猶原山上宮寺 西流 日國那河那茅渟にあり
高祖聖人上人の御茅又二十枚葺茅十九番猶原明法房の

眞宝山
浄光寺



猶原山
上宮寺
本堂
鐘楼


後三ノ三十四


本堂

小壺山
阿弥陀寺

阿弥陀と称して
仏舎利を拾ふる
図

開基なり 明法房の俗傳系の板数山の事と出沢寺流れ
粒系と遊ぶとありしと後年今の杉系に録せり ○本堂十間に面
本尊阿弥陀如来 聖人の御自作 僧坊二區あり ○宝物 聖人御染
筆十字名号 上と大経の文字に若名号の釋文 左右一枚記詰文と同じ
其外器々

小壺山阿弥陀寺 赤流 日蓮門郎 類田ゝ

二十に峯第十に の祝崗る祖の御足郷河の宮信法師の
開基なり ○本堂八間に面 本尊る阿弥陀佛 老尼上人の御作 寺領二區
宮信房 俗姓いまだ 澤なりに と申す弱年のむかし三井寺に入て聖尊の
雖紛を俗号し 図頌一衆の理に深く兼て三密瑜迦の法
と紛ふ一山其右に出る者なく衆侶其智徳に心服し係
る程に宮信自思へらく我徒得の妙法を以て衆機を化益
もるるべ雖も我道に背く者あんやと即志を決し関東さし

てゆりしが宿習の因縁忽に發起し當國に出ひて聖人に邂逅し奉る
就て聖道高上の法と説出し聖人を請ぜんに対し聖人これを耳に入
給ひ唯本願一実絶待不二の要門を立て末世愚癡無智の衆生に
他念をまじへず一向一心に弥陀と信じ奉らば次の生には佛果を得んこ
と疑ひなしと易行易行の法を立んこそ一切経と説んよりも勝れ
即得往生の名号唯他力の御法の外にはべらじと攝取微妙の要門と授け
給ひしかば実信瞞なく法我の南を打き落喜渇仰の思ひ深くして絶なる
聖人の御門徒となり信心無二の御弟子となりぬ

什宝

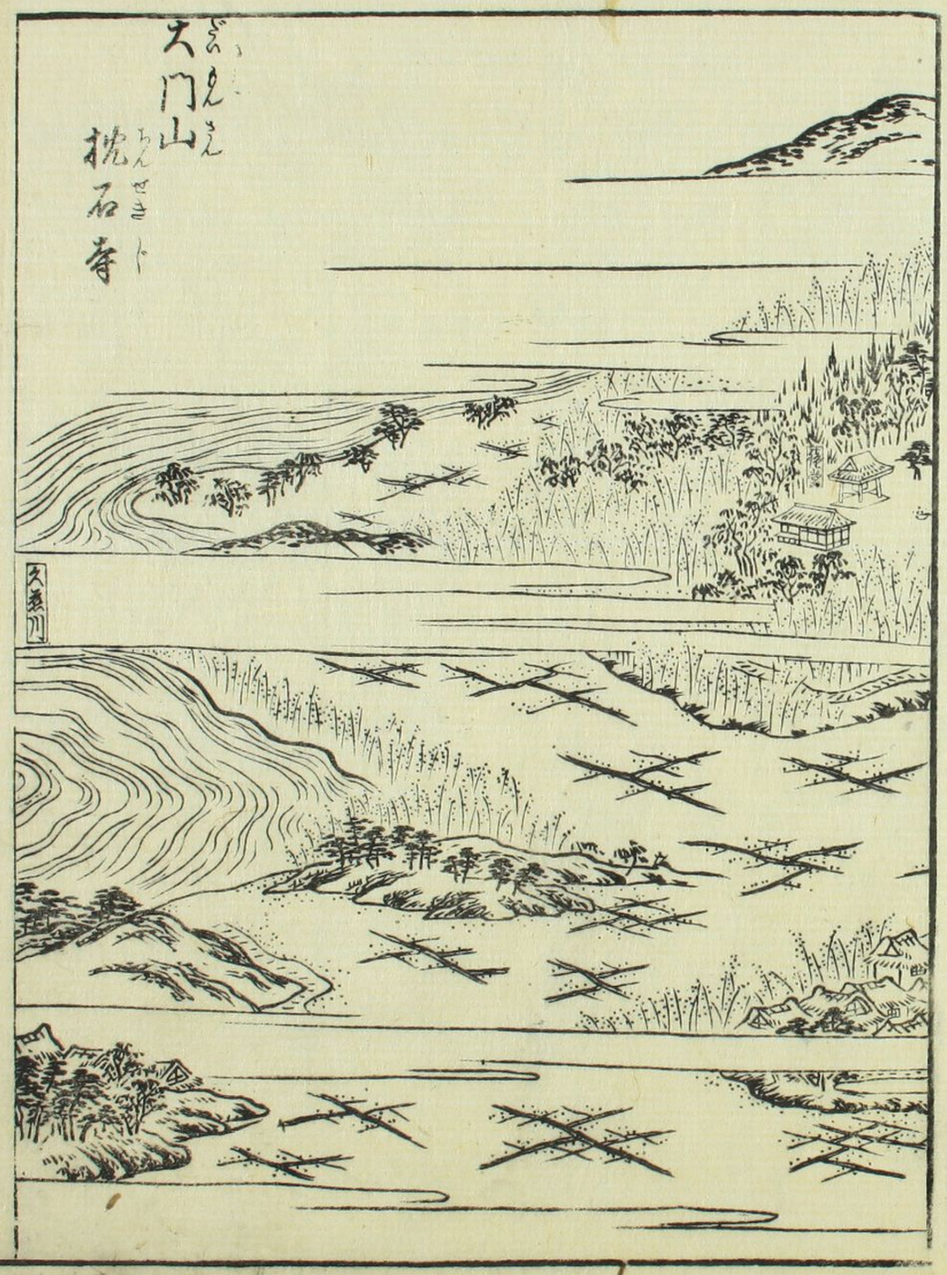
聖徳太子十二歳の尊像（聖人の御自作）　法然上人の御親筆六字十字の名号（昔に聖人の御年）　小壺の佛舎利（実信房蓮生の祖母（熊谷次郎直実の妻）の基肥を種蒔き地の穿ちたる小坪中より得て聖に奉る蓮生これを拾ひ其夢の如くに奉持し其後いくばくの年月を経て聖人の御前に奉献と始まり給ひしかば佛智感應の奇特なりと結縁の輩悦て之あげ給ふ山号を小壺山と称し永く當流の霊宝とす）

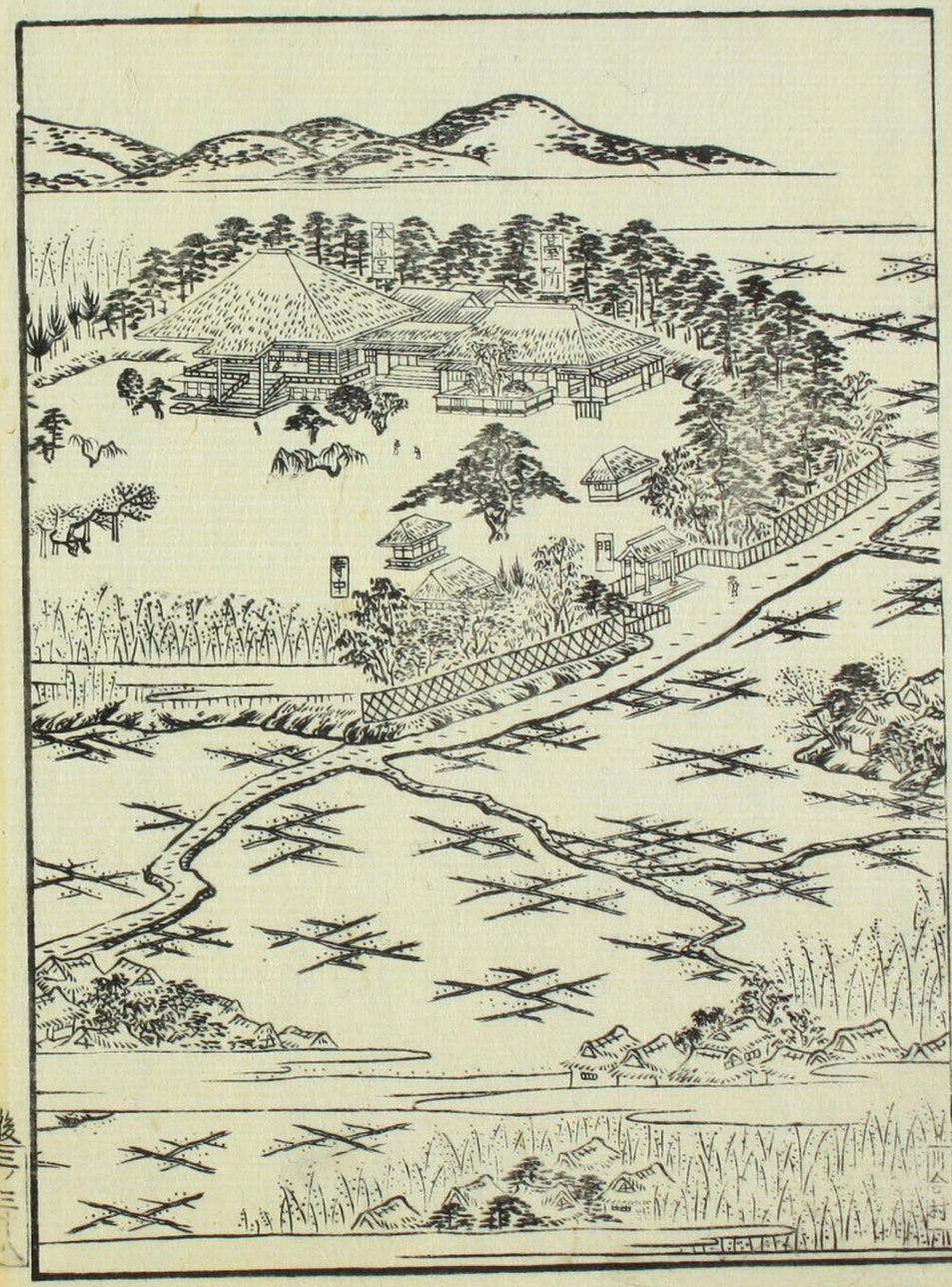
大門山抛石寺

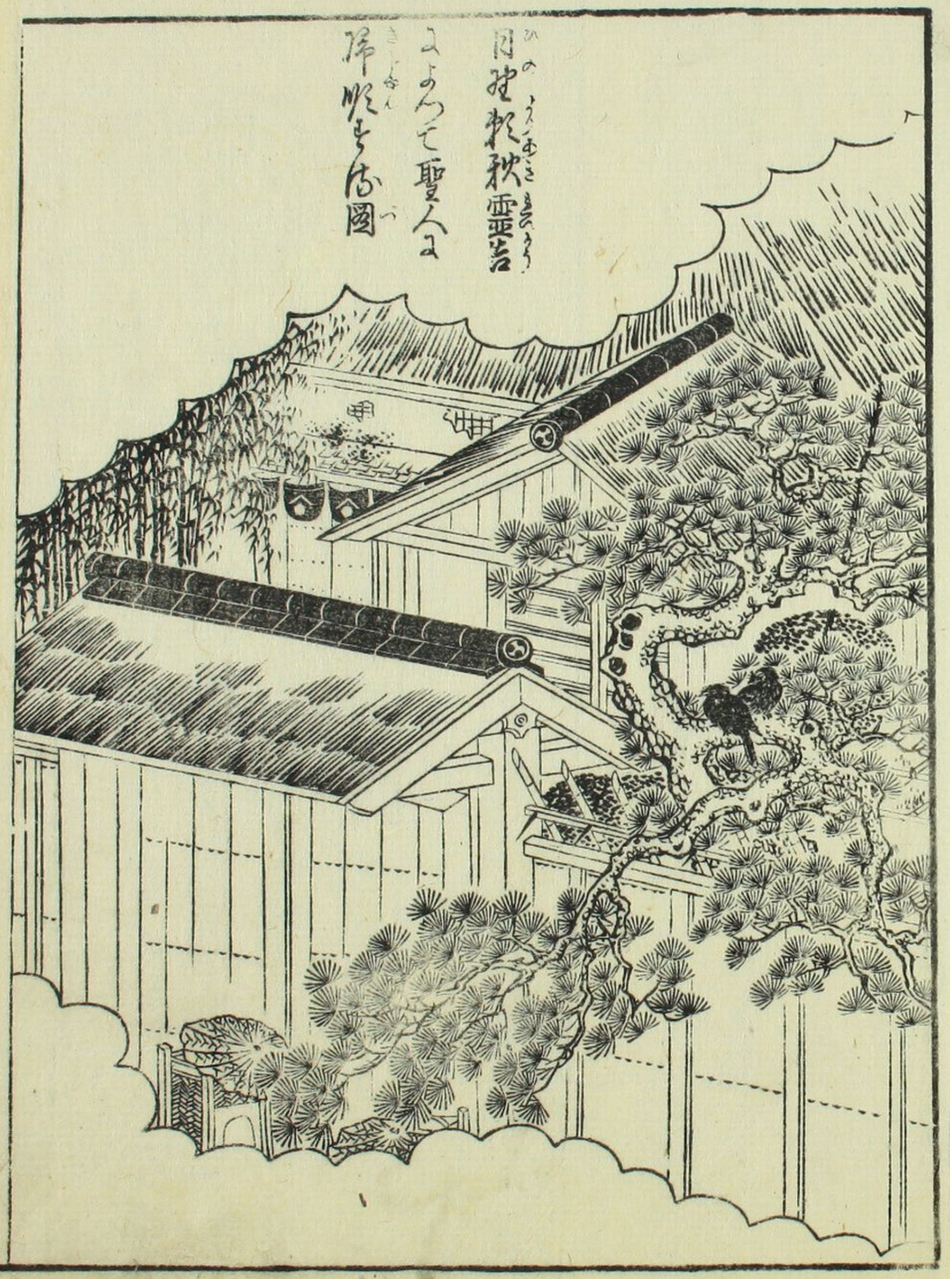
本流　日國久慈郡佐竹の郷上川合村にあり

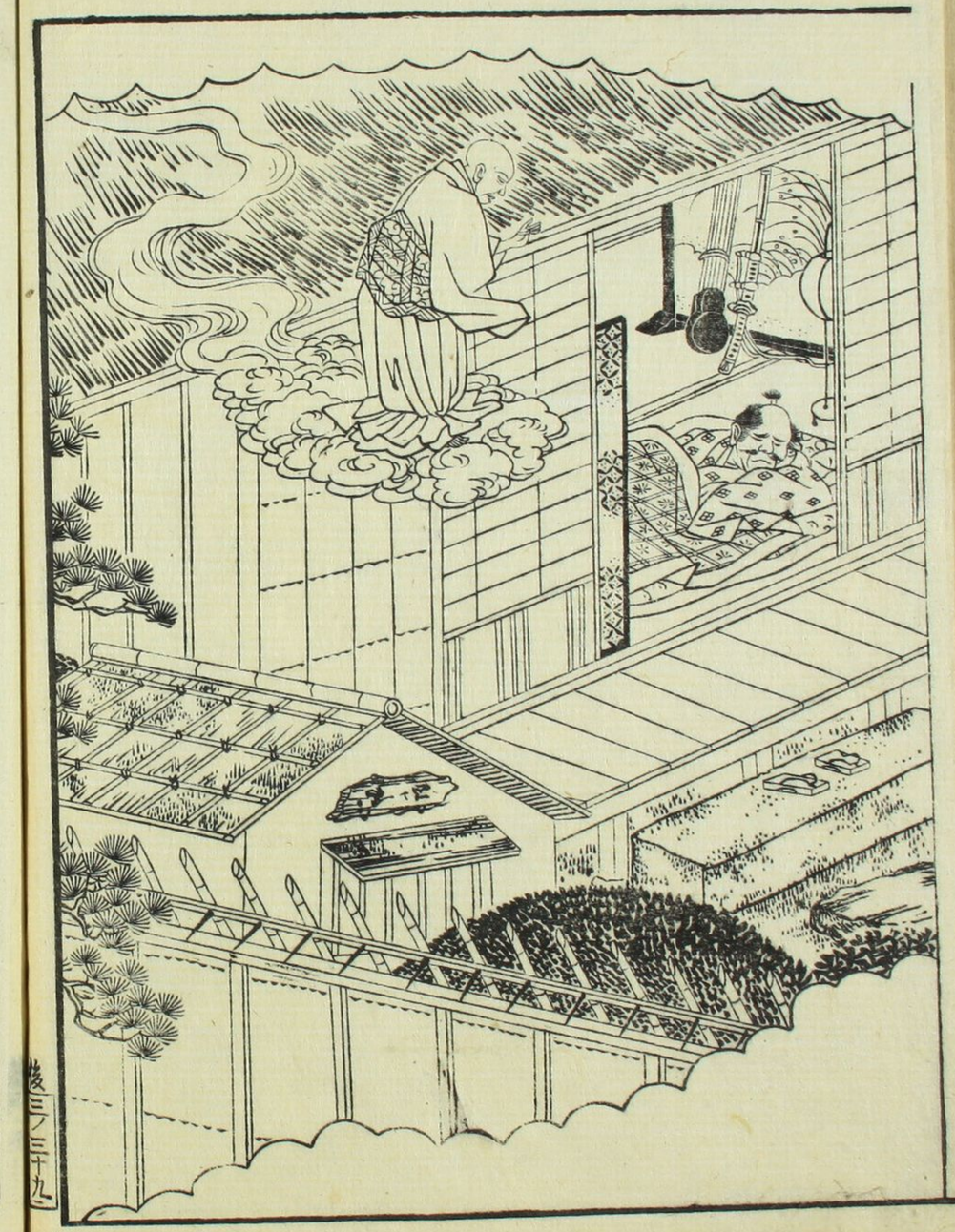
武州龍上山大門院と号し二十に軍第十五釋道國坊の遺蹟なり　○本尊阿弥陀佛（俗教大師の御作）

道國法師は江州蒲生郡日野の産なり俗姓は日野左近
拾遺に秀郷の後胤日野左衛門尉頼秋と云る士なり當時
不遇にして世をあぢきなく思ふ心より自と人の交も疎
く終に流浪して當國久慈郡大門（大門とは此三里ヵ間の総名）と云地に逼塞
してあるが比い建保元年の秋聖人當國御教化の折
から一日此大門を經回し給ふに思ひの外に日暮て宿路
遠々しかば即左衛門が家に立寄宿りを需め給ひしに左
衛門性質むくつけき男なれども御覧のごとく我ごとき住居
なれば何ぞ旅人を宿とすべきやとて帰り給へと宛想


ぶんえ
大門山
ちんざき
挑石寺
大悪川


本堂
堂所
門
堂中
後三ノ三


因地教秋霊告
よりて聖人の
降臨を感図



なくやうるがさんにんがとく外よ求むべき家居もなければ聖人
強てこれと云せ給ひしうばが尼法師の外よ腹臣これなく
去る法師なるさらばいさらぬまでよ先我様を変べしとあ合
杖をつき元て既よこれをおんとる聖人此形勢と見給ふより
矣度に外面よ出給ひ〳〵ゲ月いとやとく書てく彩先〳〵て
見へまうなが詮方なくよ立りぐ〳〵せ給ひ葉ゲ彩端よ露とふさぬ石と
む姫の枕と疾寒をまびて孫給ふよ相陸人二三の御弟子此御姿を見て
よりも御いたましさ云ん方なく涙と御仏抱と思ふ弟〳〵せなる聖
人ゲしも憂給へけしきなく支弥陀国伝の御修彩よ肉の山と繋血の
海とるゲし焦熱返寒の苦悩を浸ぎ詔載永劫身命と惜ミ給ひ
つ妥章の徳彩を積極〳〵給へ御跟雑をとひめぐらせば今此彩端の仮
屋の物の数よ元より樹下石上の我釈氏の教へうれば何〳〵なる仏

厳人や光よ付ても唯仰ぐべきい弥陀の御恩徳うれば弥報謝の称名を
頼ぶ〳〵と恰佛の御契元殊勝よ暁よ其顔も更よ々り極よ尼法門も
弟に聖人と退出〳〵なり孫面に入く体〳〵ひるゲるの一つだりと思き
此一人の化儀枕上よ立くいふ尼法門仰九夫の石さまき弟に海ケ
門よ来迎ましませ〳〵御傷こそ則西方の教を覚王阿弥陀如来まてあ
〳〵ましを勿祈るや百福荘厳の弟る像と衆生添度のるよあ〳〵且ね法師
の姿〳〵人結縁のあよ塵よまじう給ふなる仏さもたつけるく云詞
雖有悪報よりれぬるゲの愚さよさしども仰ゲ宿報真の御ゆりぬるば
幸よ他面へうつり給りば彩端をかりれ宿として石よ枕〳〵孫給へばしく
屈詰中弟〳〵せる恭恵ゲるうれ我いうれ仰ゲ多年願礼せる和の恥
世善薩と宣へと見く羨さめぬ尼法門大よ驚き即示現よ給ひ密
よ戸外を伺ふよ恰も日光の再びてゝせるごとく光明倩とうやし

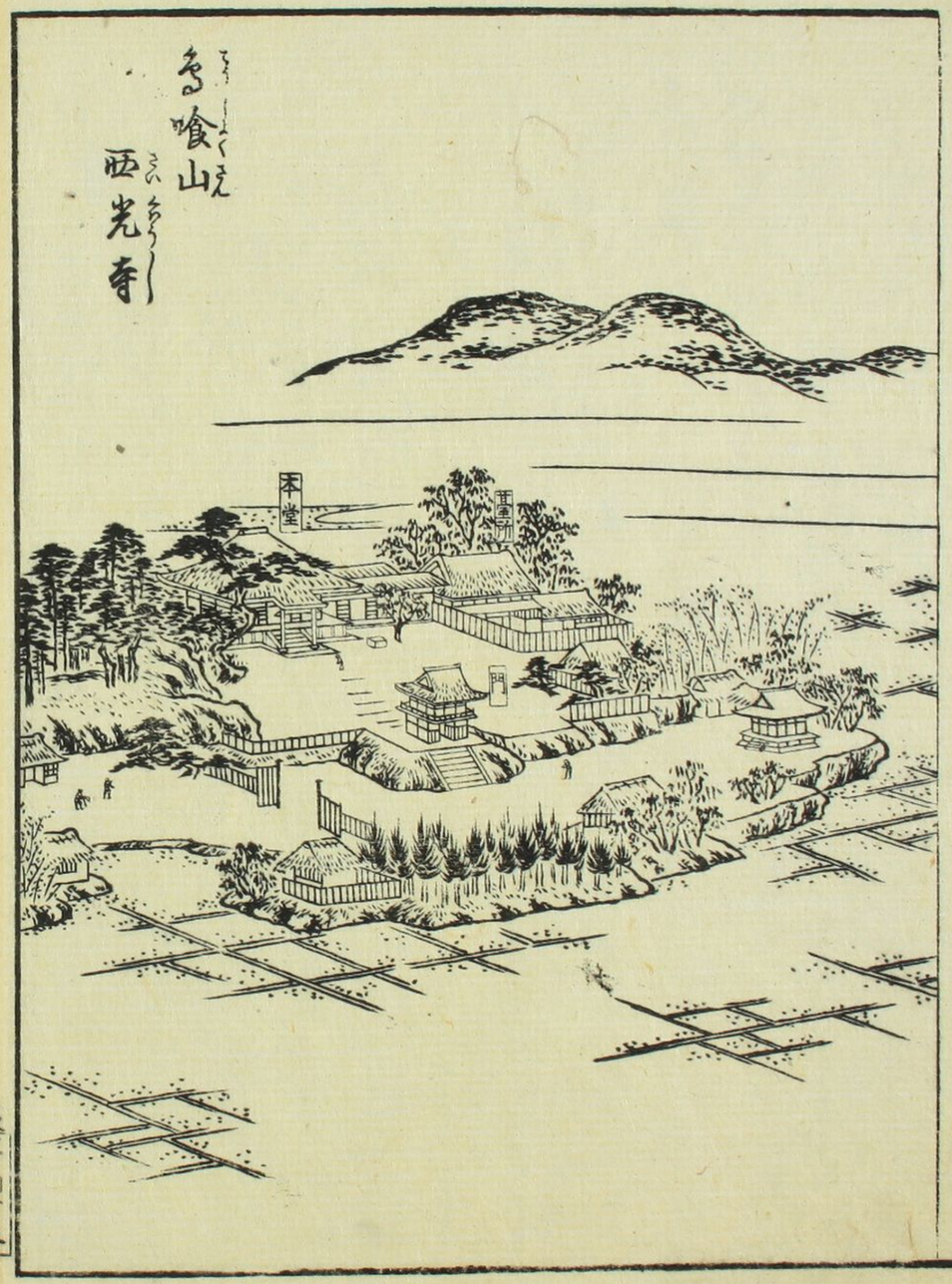
其明きを白晝のごとし尤清門心中の孫恐を聖人の御側をく恒ひ
まるふよく熟睡位給へ御息の下りこそ其光彩紙して行〳〵生
々れば尤清門の意ら大地を身を拖せんびを悔て泣まびつ我家に請ど
第〳〵せ觀音大士の御靈夢と物語り改悔の心ちりとりしかば聖人大
喜ぶせ給ひ一樹の蔭一河の流も皆これ他生の緣なれば今更心をくの
ゑまと即絶煩陸數陸機の大悪をなを撥見撥意の若巧をなて他
力本願の奥右元来直入の教法をいと念仏を唱給ひ々れば尤清門
爰不に信心發得〳〵速を御弟子の列を後んの願ひを願ひ
を聖人これを許〳〵て即釋道圓と法名を授け給へ御
り道圓房孫本願を信〳〵聖人を為る事を他を
結う宴を抑ひく一宮を造立を聖人を請〳〵奉り
々れば心よく入御ならせ給ひ法圓をまやうり道圓房法

〳〵ちよう聖人御化益御幸労の恩德須弥もなをとの
らそらば蒼海も涙きを讓ろう芝といんで来世の報をみ
ん来さらん我らば物を名つけて其名を後来を殘れを如とと
即聖人を願ひをり拠石をなて後を寺号をは立をけれ
とちん 後年いさうゆえんあく寺と今の地を
うけさう拠石村尤清門が古郷い奥を生れ
御首入御新 御傳絵を来〳〵給へ爰禪法橋を聖人の真新を写しやさう御爰禪義週を
願載あり しい入西房ふ中とりやこれ即道圓房の御方を聖人を感得〳〵御首外を写し奉り〳〵と
ちく常陸給仕せらを名ることを聖人を出を聖人御首の御新を傳絵せりを高田寺修寺に
日蓮の御新あり何きう〳〵法の手法なりや来其真絵とあれ

○宝物 拠石 高祖 〔用〕基入西房道圓の畫像名也其外畧ら

鳥喰山西光寺 東流 日國日郎谷河原ふり

無量光院と号し高祖聖人嬌茅二十日宿茅二十日だん
名喰唯圓法師の芳蹟なり 四国國那河郡名喰ふ就ふあり新代お後連絵
本尊阿弥陀如来 紛基菩薩 名号真像の御新 聖人御真筆十名号 ○
寛文元年巳年焼再興せり
其名に聖人日十日藏の御



新を写す　其外什宝墨そく

久末願入寺　東流　日國寺河郡久末村にあり

当寺い高祖聖人御孫如信上人嘗て奥州大網に精舎を営築

ましく弘法ゆせ給ひしより第十二世如正に至りて当寺へ移

せ附の遺跡なり其後十五世如高の代

府若　喜捨の大功徳を真しく給ひ当院と宮田巌永に

給ひ諸堂魏〻荘厳る精舎とはなりてそ

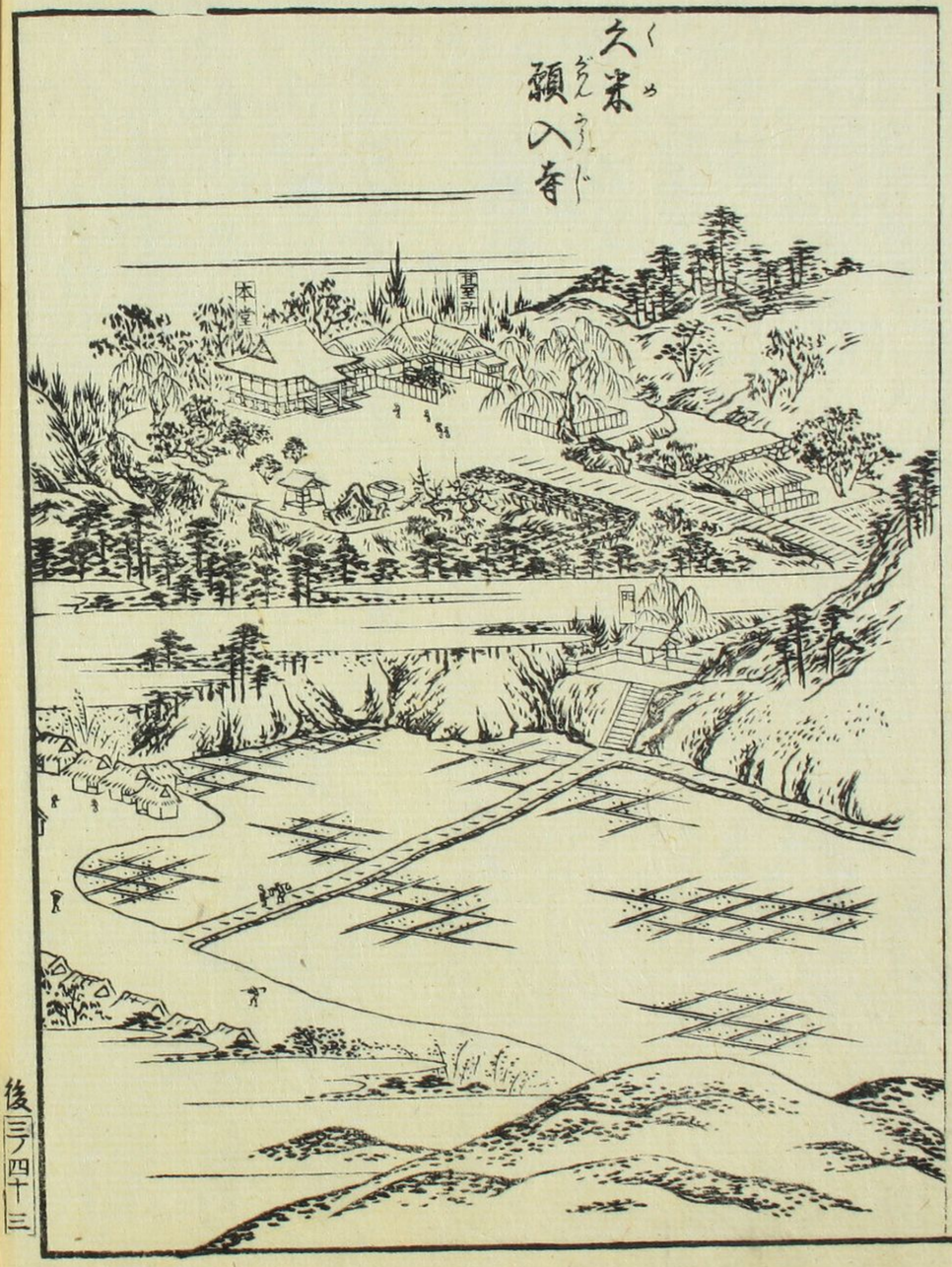
畠谷山覚念寺　東流　日國日郡金澤村にあり

二十世巣第二十三畠谷唯信法師の開基なり

唯信房と申い加当國保内小淵畠谷の住人にて俗姓を畠谷

次郎信勝とゝ畠年高祖聖人奥州御化益の砌

信勝聞法陸喜〻て終に御弟子となり金剛毫二の信者に



久米
願入寺

後三ノ四十三

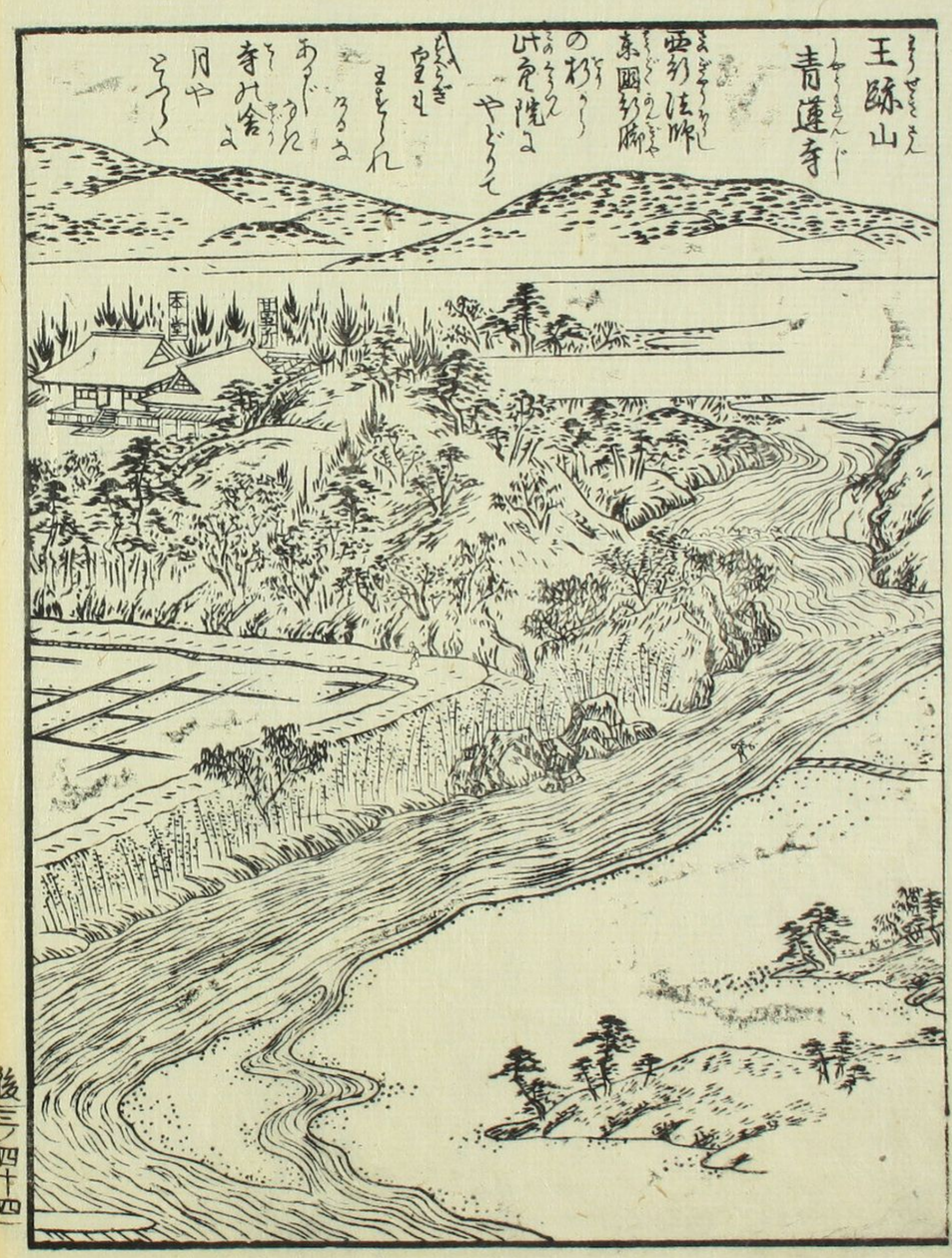
より此を抑ひて故郷畑谷を記し專ら弘法を
後世に地を再興せりとぞ
○石州濱田永勝寺も唯信房の遺跡なりとぞ傳ふ云所房畠谷
紀を抑ひて一宇を興せり後総州及び泉州へ勝手せり
絶を紀をも佐ふて石州へうつりとぞ

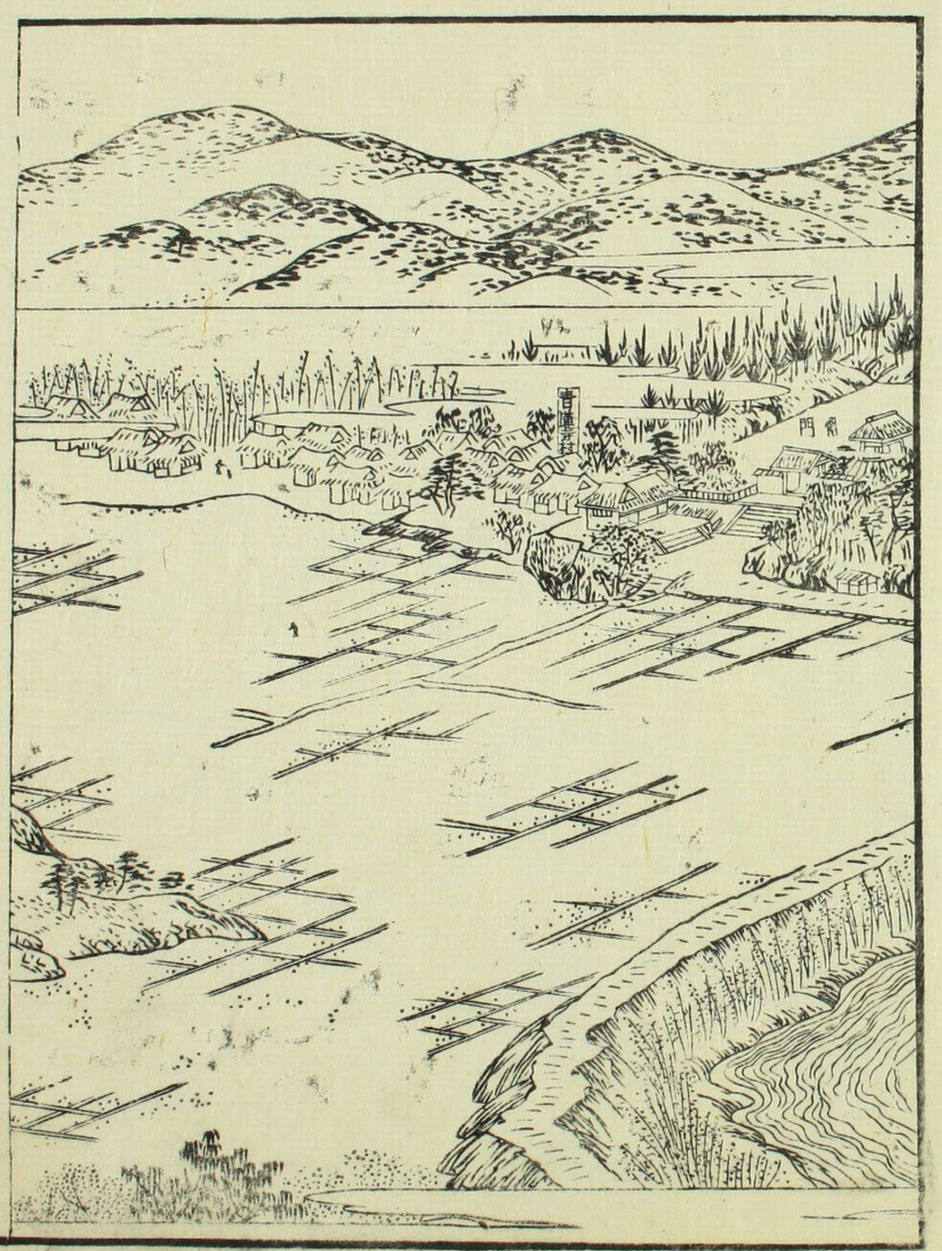
大門枕石寺　津古原　日國久慈郡大門村にあり

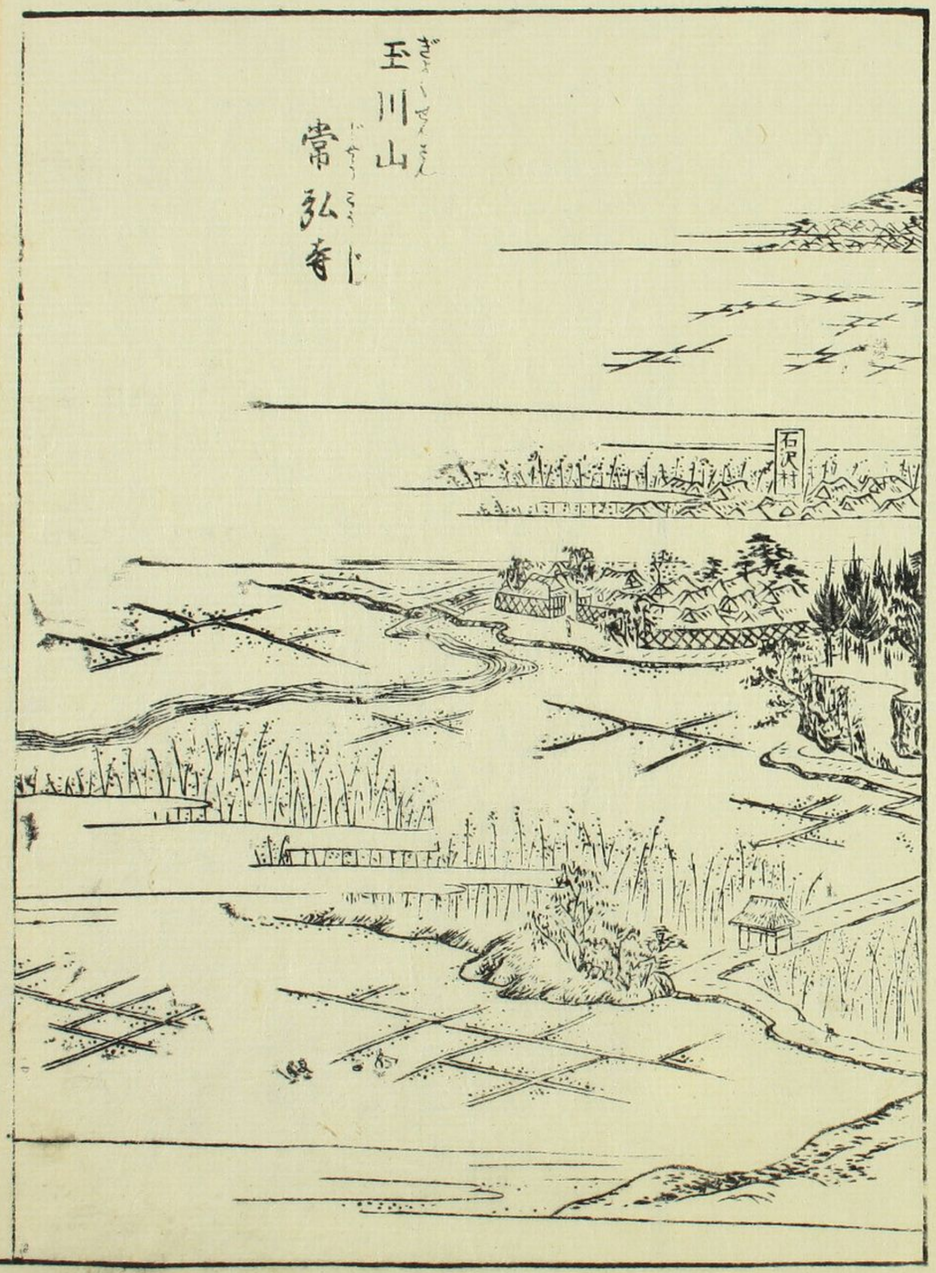
河合枕石寺の舊地なり當所に日拔尼法門入道道圓房の
墓あり　始めは西枕石村の東なる山際に拔のむしまる石塔あり
其中に雜歌してあり　中古迦師に百回所忌の義今の正稱なり

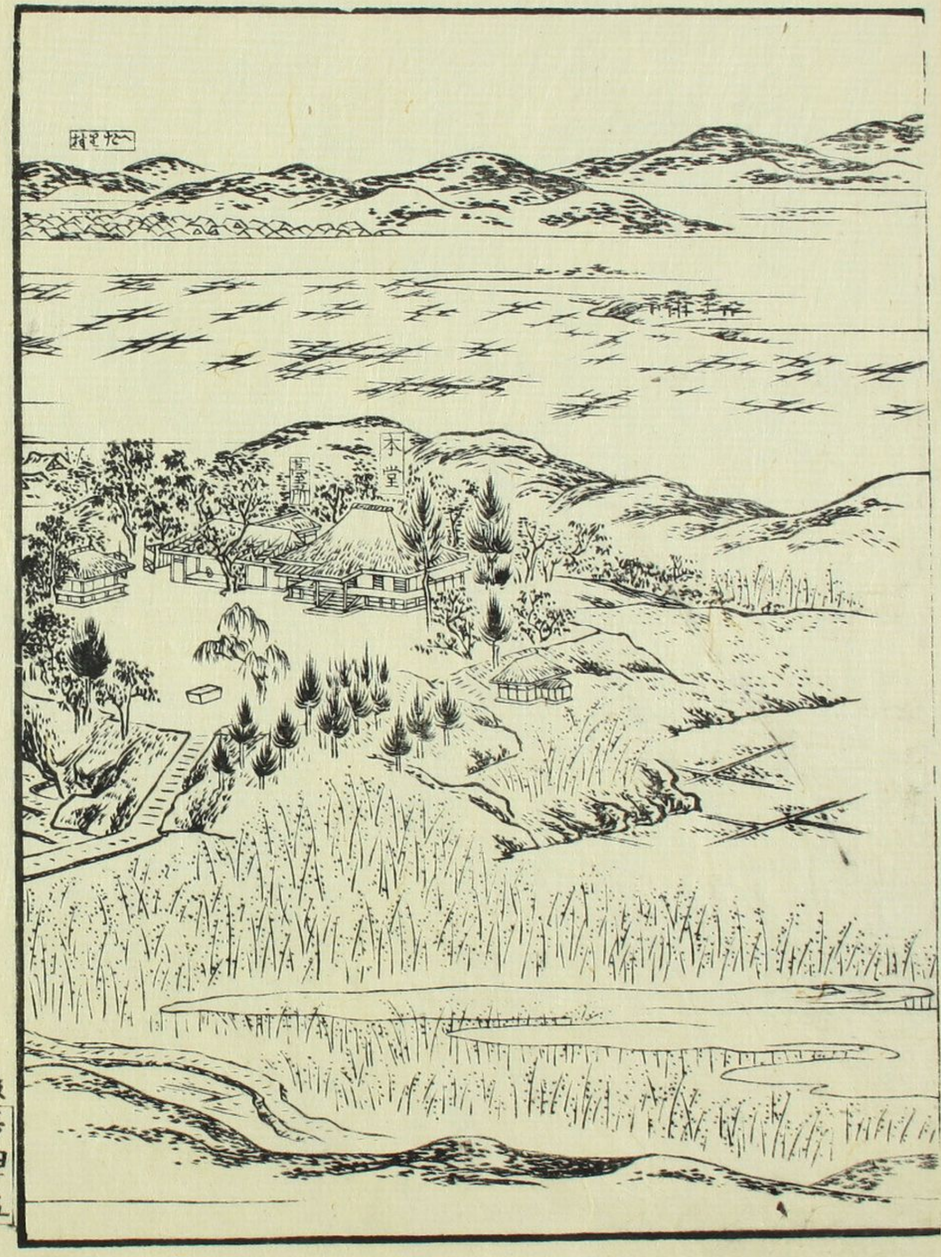
枕石村　日國日郡大門の西なり

往昔聖人石を枕し尼法門を化度給ひ旧地を見にして絶
に村の名とせりとぞ　此村に二ヶ所の坂あり其坂の口に
王跡山青蓮寺　西流　日國日郡赤蓮寺村にあり　日拔尼法門の宅地の跡なりとぞ
齒院に二十尼衆等八名飼護性法師化義の遺跡なり　法性房の傳に詳要


王跡山
青蓮寺
西行法師
東國行脚
の杖つく
此院に
やどりて
望月
あるじ
寺の舍
月や
本堂
開基所


青蓮寺村
門





後三ノ四十五

鎮護国家寺

○本尊阿弥陀如来 春日の他

往昔何某の親王とゝやし止へのうき所方此地に隠遁
ましくゝて其跡に一宇を建立して王跡山東蓮寺と号せしと
いへり 抑当宗祖聖人歯王御教化の折ゝ此寺の額虔
せる給いさ給い即法性房に命じ芝を修補せしめ給ひ
しかば此に拠て法性房歯寺に住持し号て蓮寺と改
め弘法寺ならびに絶え真宗の伽藍となれり

玉川山常弘寺 西流 日國那河那石澤村にあり

宝寿山玉ゑ堂と号せり歯院い高祖上足の弟子村田慈
善房の開基と慈善法師い二十年番の内第二十番に配歯
と 武蔵に拠り村田村に建立あり しかるに後年に及ぶて石澤村田
石澤い村城お楼ならびに弘寺の境地村田数ケ所と冷い石澤ならびに芝と数ケ所
なり 慈善房俗名ようとのりと號に六百年の星霜を経ること
基礎の名く流潤なる法嗣世々相続して未無断を設ずるの霊場なり

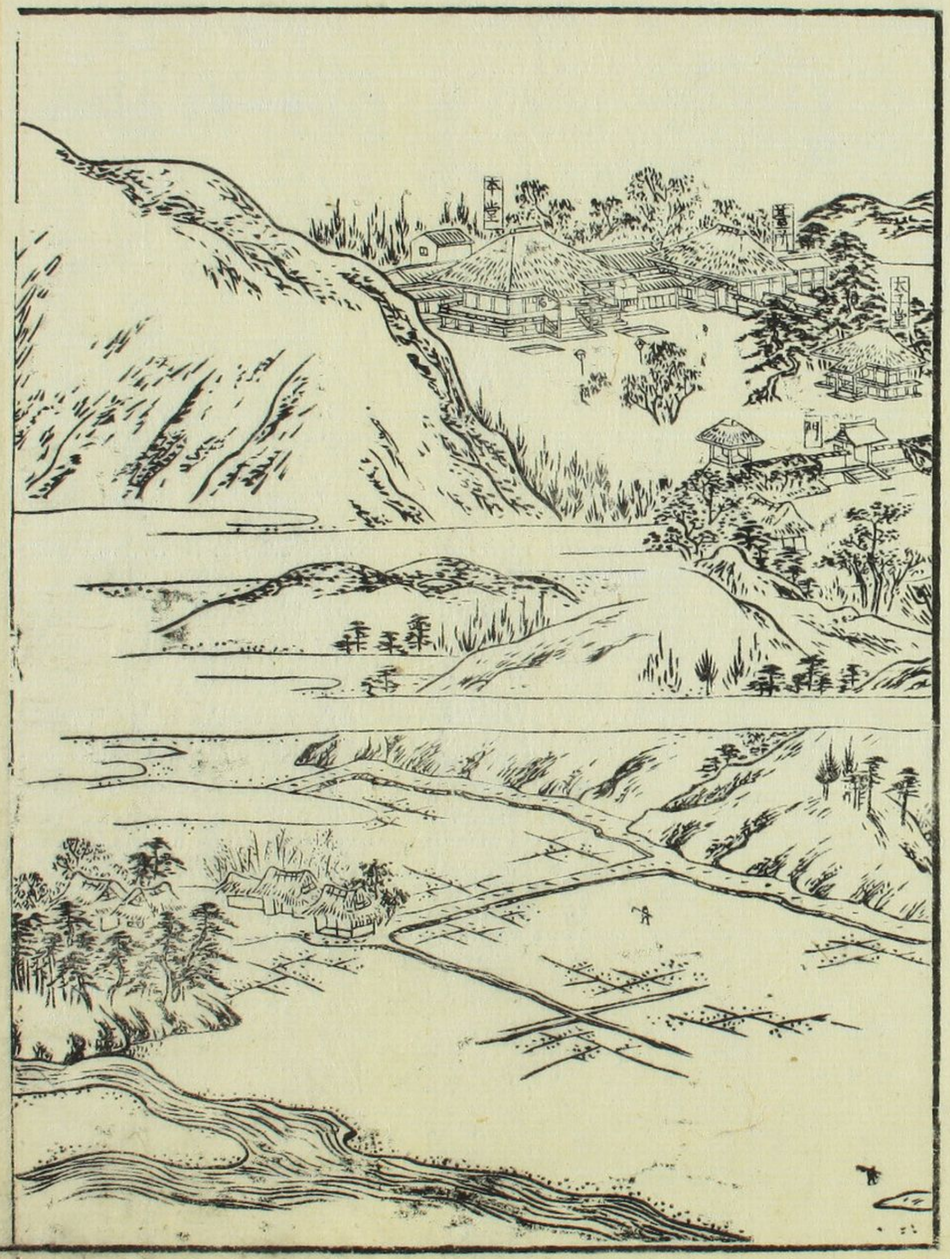
○本尊阿弥

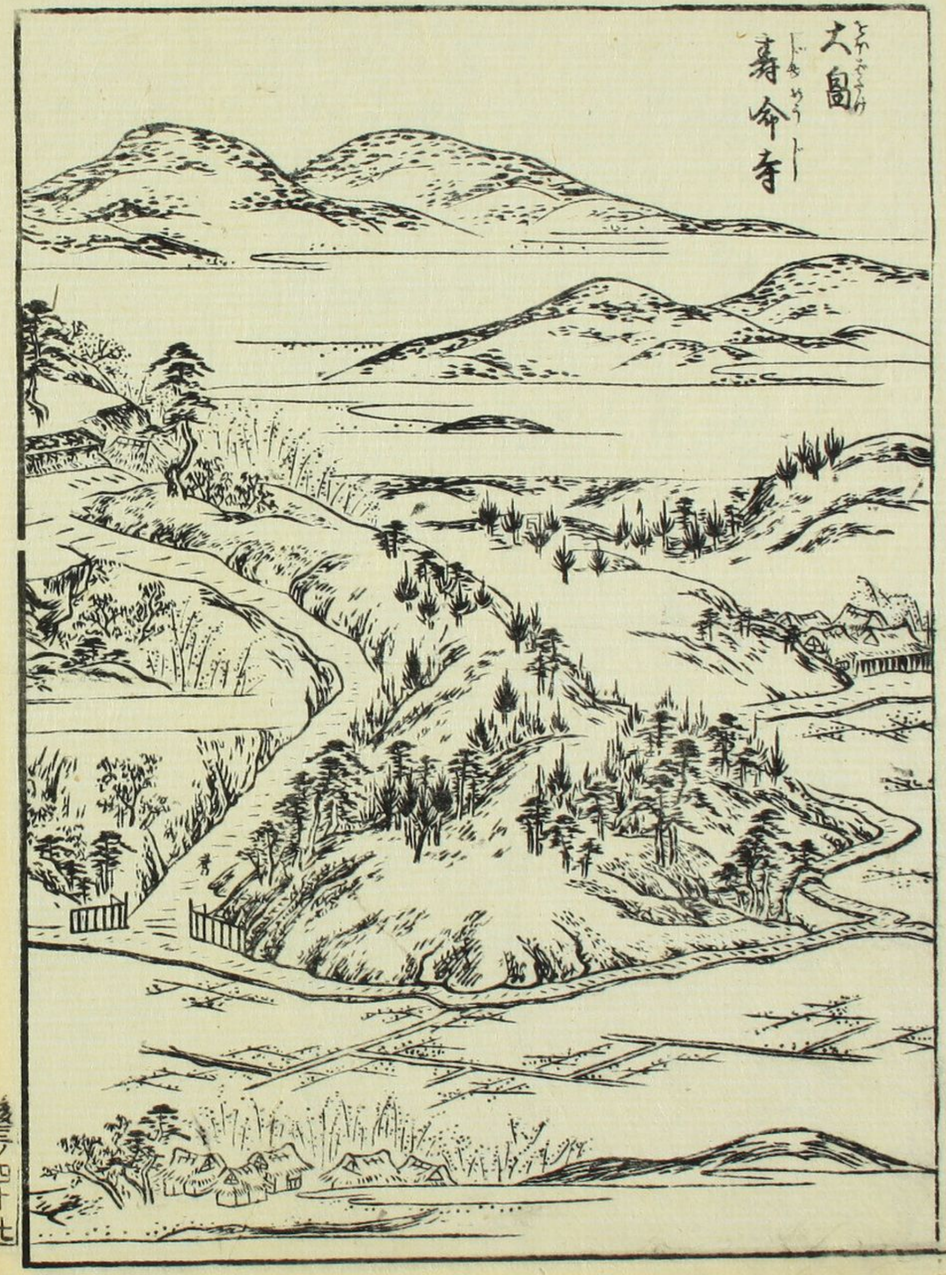
陀如来 春日の他 其外霊宝聖徳太子の像 府自他 開基慈善房
像自他 等なり

明法房墓 石沢より北に七丁を経て東なる小川と東なる村の合なる
此所い明法房いまこと雛園となり修験者ゝ附の宅地と
で今尚古墳石墻なとの跡あり碑面に猶原明法房墓と
記せり ○右墓より五十間ばかり北に法寿寺とゝふあり歯院の寺
なり上宮太子の御祖みて明法房急持仏の兼歯寺の開基なり上宮
寺の三世教正祖の明法房の像を安置

信願山寿命寺 西流 日國那河那大畠にあり

蓮華堂院と号し二十年番第十六番聖人の神足宗澤
入信法師の開基なり ○本尊阿弥陀仏 春日の他 入信の像 自他
上宮太子の像 府自他 等を安置せり


本堂
書院
大子堂
門


大島
壽命寺

入信数善提心の因縁をいふなり俗姓は清和源氏の苗
裔義景の嫡孫四郎隆義の息侍竹冠者秀義の長男也
其身武門に生まれ〻朝香人間の不実を観じ大なる世の
栄利を厭ひ深く菩提の道に入て完澤なる蓮地に菩提を
ちらひ深く菩提の道に欣求し自力の念佛捨らはして
西方の往生をぞ期し〻うる実に宿善数劫の附いうて或
夜不思議の霊夢あり其模凡常ならざる法衣の人忽然と
して来臨し偏西方の往生を求るに多年に〻称名念佛
怠慢なしこれ〻自力の功徳いとゞ〻に億万劫を積るも
其甲斐なゝ〻に去るゝ〻偏に信心餘念なきをもて今其
旨趣をとゝさん乞急ぎ小海の里に赴て親鸞聖人に詣し た
てまつり弥陀の密教本願他力の御勧化を蒙り速に如来の

慈海に浴とゝ我いにしへ西方の僕なりしがゆめ〻疑なきなり
もし若法ひ虫に天邊に花さう待とて見さめぬ 附に建保七年
入信実に抑ひ〻大に歎び我年来の素願濫吳の附に
と急ぎ聖人の禅房に詣霊告のまゝに物語りし仕て教示
を願ひ〻ば聖人いと懇くもてさ世ひ即教化し給へ様
実他力弘願の称名に自一筋に後世を助らんるにこそ
不思議なあ〻に助け給ふなり 附智の不可思議なれば弥陀の
本願末代愚智の衆生をぞ不助け給んとある御ちうひに
う世露疑ふ心なく諸の雑行雑修をふりすて御助け一実
往生に治実と一向一心に信じ奉るより外に別のなし細に
信〻来〻せ上すてい報謝の称名嬉敬なく寝ても寤ても
唱へ奉唱へるなの称名なれば義に万唱へるも佛恩報謝の

ゐると心得るべきぞ誠の他力本願の念佛なりといと念ごろに
御勧化ありしかば入信忽ち其意を發得し法悦歓喜
絶えんばかりなる淺ましの凡夫心やまで自力をたのみつるものの
御ろかさよ如来大慈大悲の恵沢値遇なしがたき今度の一大事
遂ましさふかく雖ども聖人と三拜して御弟子の列に眞
らんのを願しうば聖人も其志の変きに感じ終に御禁絶
ましませり入信弥信心堅固にして日夜朝暮のまうちに
佛恩報謝の称名をこそ喜びけり御年眞元年春二月
聖人の命によりて當寺を開闢し專ら他力本願の奥旨を
弘通ありしが建長三年三月二十又日不思議の大往生をぞ
遂らるる　入信始め完沢に住し次に地頭職を捨て大島に不退脇の基趾を開く
○宝物六字名号畫像の弥陀　皇太子の肖像各共に聖人の真筆なり

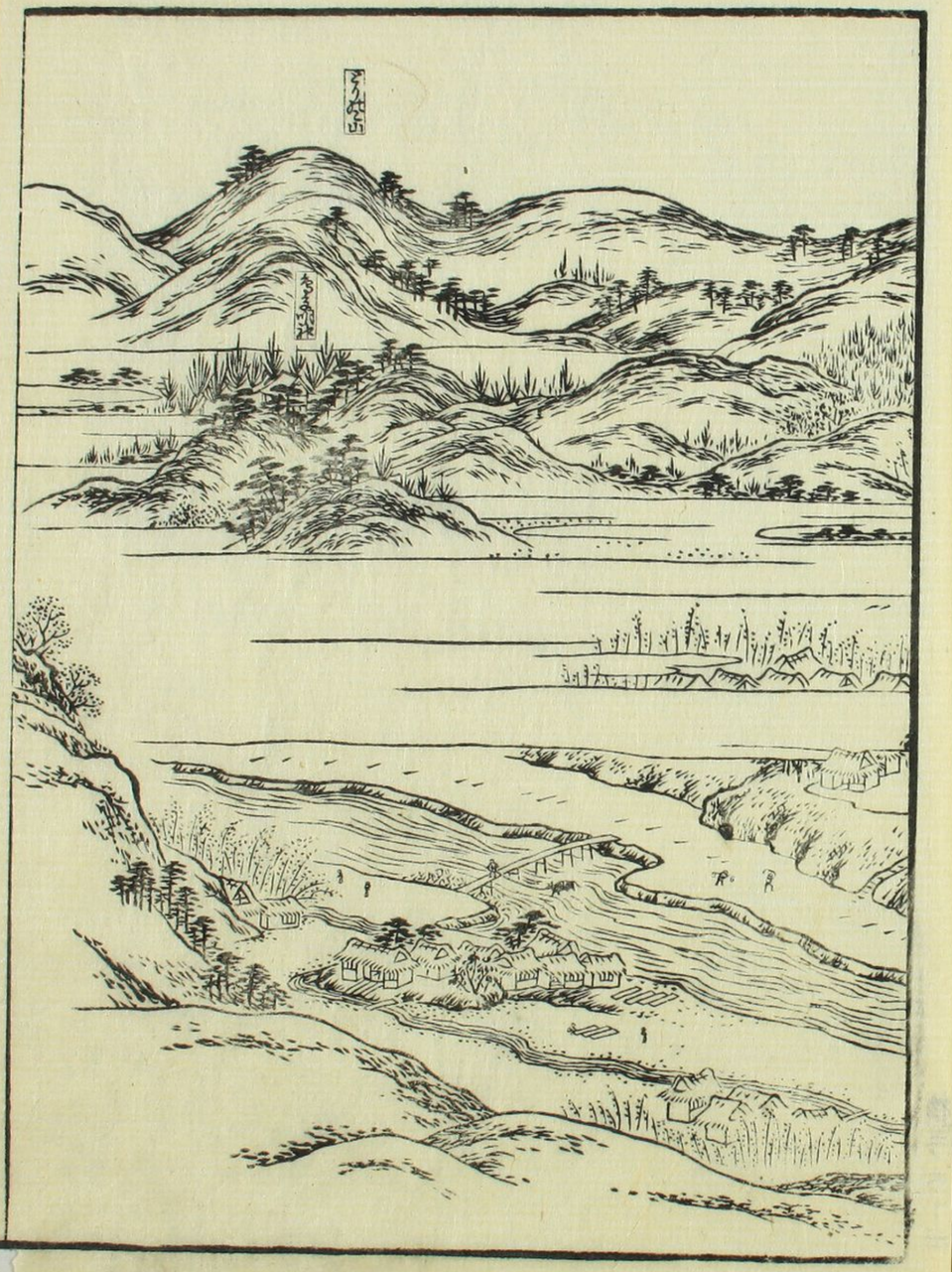
○專命寺は中津川のかたわらにて転場多し此石より水戸の藩を元二十里
ばかりなれども此道御四脇なれば舟を雇ひ遣はしたる後
あれば極めて四ばし

額光山若徳寺　西流　月州月邦禁ずまれよあり

當寺は二十代巣第十二の正當久慈若念房の遺跡にして水戸
坂戸若徳寺同系なり　○本尊安阿弥の作　高祖聖人御
真筆畫像の弥陀十字名号を安置せり
毘沙幢山照願寺　東流　右同系なり
開基は二十代巣第十七番奥郡念信大徳とぞ学えし
○本堂九間に面本尊弥陀佛　春元作
念信房俗の苗姓は源氏にして清和天皇代世の孫多田満仲
代の後裔伊豫守頼義の三男新羅三郎義光の二男光長
より三葉頼氏なるは男高澤伊賀守氏信なり代々号第

鷲の子
若徳寺

本堂
庫裏所



毘沙幢山
照願寺
本堂
天王堂

金沢願入寺

本堂

宝所

山門

の家なるが能中氏信の性禀強勇にして膂力人に絶〜智謀兼備の武人なりしに宿緣のるせるや齒國稲田の房舍に於て聖人に謁〜きり專修專念の法旨を聽聞〜忽ち化力幸願の惹海に悟入〜洋古の真門を發得し乾に依て真應元壬午年永く史宅の門を出く遠く善提の室にのがり法名念信と稱り御弟子の列に加りしが即毘沙幢村に一宇を新造し照願寺と号ら化力念佛の法流を遠近に弘通せ更に終に寛元三乙巳年三月十六日寂を示しけるとぞ

上ケるる沢山に居城〜てありしが聖人の御弟子なり思沙幢村に一宇と言築せしより先に稱りて建立し山を名て甚る修験寺なる沢の城と称し〜てあるが先に老僧に及びて其子に居城を奉りて初髮〜て照願寺に隨侍し〜てあるが三代信先の時に至りて退轉せしとぞ

○什宝　二河白道の文　聖人御筆奥に六字名号御自名紙奉八十歳とあり

政長公忠之の御修文外記奥書に先如上人七十五歳の御筆なる故上ケ

國君　より庭巖の御寄附ありしなり

○什物　御繪傳記卷　鹿樂の法服の画　法論之

後三五

○鎌倉の名山に和對〜て山王權現を勧ると云ふ後の山あり絶頂より北方と能むに隣國の山川見ゆ其碁盤〜て其風系に〜奇絶なり　業居に

ありて甚自然なり此石即常陸下野の國境なり

蒜崎山惹願寺　東流　下野國上那須郡烏山栗野に

齒寺及び栗野山惹願寺〜も拜礼の巡廻なれば除き記て古跡に挙る

の〜縁起國流に見て國分の例に記て下野國に入れとなるべし

栗野山惹願寺　西流　同州同郡烏山民部郷にあり

古屋堂願入寺　東流　常陸國に惹郡上倉澤にあり

齒院に如信上人の御廟所なり　是即御門弟藤岩法師の遺跡〜て上人御墓の地に委しく若紙紀入寺に紀を

岩紙願入寺の御拾所殺寺二區あり　○什物上宮なる御

自作の像　國君御再直　如信上人への御親御手

○銀杏の大樹　上人御墓の傍　まの〜素中志洋

親鸞聖人御舊蹟　二十四輩巡拜圖會後編卷之三終